



上郷西遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第25集

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第448集

上郷西遺跡

ハツ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第25集

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



- 1 遺跡俯瞰図
北東方向から西吾妻地域を望む。
吾妻川が中央部を東流する。
遺跡の約25km南西には浅間山がそびえる。

(カシミール3D ver.8.8.11により
篠原作成)



2 3号土坑(陥し穴) (南から)



3 5号土坑 (南から)



4 高井東式土器



5 弥生前期土器



6 1号竪穴住居 (南から)



7 1号竪穴住居 竈 (南から)



8 1号竪穴住居出土 羽釜



9 2号竪穴住居 (南西から)



10 2号竪穴住居 竈 (南西から)



11 2号竪穴住居出土 灰釉陶器



12 江戸時代 (天明三年) 畑・道・溝 (南から)
※画像データ2枚を合成により作成

序

ハッ場ダムは、群馬・長野県境を源とする吾妻川の中流に建設され、首都圏の利水および治水を主な目的とする多目的ダムです。

このハッ場ダム建設事業に伴う発掘調査は平成6年から開始され、現在までに、長野原町の川原畑・川原湯・横壁・林・長野原の5地区、および東吾妻町の三島地区内の計30を超える遺跡において、縄文時代から近世までの人々の連綿たる営みの跡が確認されてきています。

本遺跡の発掘調査では、縄文時代中期から弥生時代前期にかけての土坑、平安時代の竪穴住居跡、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた畑・道・溝など、それぞれの時代で特徴的な資料を得ることができました。

このことにより、本遺跡は吾妻峡出口にあたる北向きの僅かな面積の平坦地に立地するにも関わらず、縄文時代にはじまり、とりわけ平安時代においては人々の住まいや暮らしの様子の跡が、また、江戸時代においては泥流に被災するまさにその時までの人々のたゆまぬ農耕への努力の跡が、時を隔てた今日に至るまで色濃く残された貴重な遺跡の一つであることが分かってきたのです。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、国土交通省はもとより、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会、長野原町教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆様から多大なるご尽力とご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げますとともに、本報告書が広く歴史的資料として活用されることを願い、序といたします。

平成20年8月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う上郷西遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
調査原因は、町道新井横谷松谷線工事事業に伴う発掘調査である。
2. 遺跡の呼称及び所在地
上郷西遺跡（かみごうにしせき）
群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字十二沢6676-6、6677-3、6679-3、6680-3、6682-3、6684-3番地
3. 調査面積 1,085㎡
4. 事業主体 国土交通省
5. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査及び整理作業の期間・組織
（平成19年度）
●発掘調査
期 間 平成19年5月8日～6月15日
管理・指導 理事長 高橋勇夫 木村裕紀 津金澤吉茂 巾 隆之 中東耕志
事務担当 笠原秀樹 齋藤陽子 矢島一美 須田朋子 吉田有光 若林正人
調査担当 中沢 悟 篠原正洋
■整理作業
期 間 平成20年1月1日～3月31日
管理・指導 理事長 高橋勇夫 木村裕紀 津金澤吉茂 巾 隆之 中東耕志
事務担当 笠原秀樹 齋藤陽子 矢島一美 須田朋子 吉田有光 若林正人
整理担当 篠原正洋
7. 報告書作成関係者
編 集 篠原正洋
本文執筆 篠原正洋
遺物観察 篠原正洋
石材同定 渡辺弘幸
遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一
そ の 他 土器実測図作成に際し、縄文土器全般については山口逸弘に、高井東式土器については高橋清文氏に指導・助言を仰いだ。また、遺物分類及び選定等に際し、平安時代土師器・須恵器等については中沢 悟、石器については小野和之に指導・助言を頂いた。
8. 発掘調査及び整理事業での委託関係
遺構測量 株式会社 測研
遺構図及び遺物実測図、遺物及び遺構写真デジタル編集 株式会社 測研
整理補助
株式会社 歴史の杜より派遣（田村敏子 清水鏡子 高橋きよみ 角田千枝子）
9. 出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
10. 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略）
国土交通省関東地方整備局八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会文化課、長野原町教育委員会、東吾妻町教育委員会

凡 例

1. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて2002年4月改正前の日本測地系を用いている。
2. 遺構図及び遺物図には該当箇所にスケールを、或いは()で縮尺を掲載した。原則下記の通りである。また、遺物写真と遺物図とは同縮率を原則とした。

〈遺構〉

住居 1:40 住居竈 1:20 土坑 1:40 焼土 1:30 畑・溝・道 1:150

〈遺物〉

土器・陶磁器片 1:3
個体土器 1:4
石皿・打製石斧・石核・砥石 1:3
釘 1:2
刀子 1:3
鉄砲玉 1:1

3. 遺物図中のスクリーントーンは、以下を表している。



4. 遺構図中における遺物番号は遺物実測図と一致する。また、●は土器、□は石器の出土位置を表している。
5. 4号土坑は、調査終了後、風倒木痕と判断したため、欠番扱いとした。
6. 第5図は、平成20年3月31日現在において、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により作成された図を一部改変したものである。
7. 遺構埋没土等の土層注記及び、土器・陶磁器類の色調等には、農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年度版を用いた。
8. テフラについては、略称を使用している。
YPk = 浅間草津黄色軽石 (As-YPk) (新井1962) 柏川テフラ = 浅間柏川テフラ (As-Kk)
9. 平安住居埋没土中出土の縄文土器等は遺構外扱いとした。

参考文献

新井房夫 1962 関東盆地北西部地域の第四紀編年 群馬大学紀要自然科学編

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図表目次・写真図版目次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	3
第3節 調査区の設定	3
第4節 基本土層	5
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 縄文～弥生時代の調査	16
第1節 検出された遺構と遺物	16
(1) 土坑	16
第4章 平安時代の調査	18
第1節 検出された遺構と遺物	18
(1) 竪穴住居跡	18
(2) 焼土跡	25
第5章 江戸時代(天明三年)の調査	26
第1節 検出された遺構と遺物	26
(1) 畑	26
(2) 道	31
(3) 溝	31
第6章 遺構外の出土遺物	32
第1節 出土状況と遺物内容	32
第7章 まとめと課題	35

抄録

写真図版

挿図表目次

表1	周辺道路一覧表(1).....	14
表2	周辺道路一覧表(2).....	15
表3	2号土坑遺物観察表.....	16
表4	5号土坑遺物観察表.....	17
表5	1号住居遺物観察表.....	20
表6	2号住居遺物観察表.....	25
表7	畑計画表.....	26
表8	1号畑遺物観察表.....	30
表9	2号畑遺物観察表.....	31
表10	遺構外出土遺物観察表.....	34
図1	遺構位置及びグリッド設定図.....	4
図2	基本土層及び旧石器試掘位置図.....	5
図3	三島村天明三年泥人図.....	7
図4	遺構位置図.....	8
図5	遺構位置及び周辺道路図.....	10-12
図6	縄文-弥生時代全体図.....	16
図7	1・2号土坑.....	16
図8	2号土坑出土土器.....	16
図9	3号土坑.....	17
図10	5号土坑.....	17
図11	6号土坑.....	17

図12	平安時代全体図.....	18
図13	1号住居(1).....	18
図14	1号住居(2).....	19
図15	1号住居出土土器.....	20
図16	2号住居.....	21
図17	2号住居遺物出土状況.....	22
図18	2号住居遺構.....	23
図19	2号住居出土遺物(1).....	24
図20	2号住居出土遺物(2).....	25
図21	1号畑土層.....	25
図22	畝サカタ状態確認トレンチA-A'.....	26
図23	上郷西遺跡江戸時代(天明三年)全体図.....	27-28
図24	1号畑B-B'.....	29
図25	1号畑C-C'.....	29
図26	1号畑出土遺物.....	30
図27	2号畑D-D'・E-E'.....	30
図28	2号畑出土遺物.....	31
図29	1号道・1号溝F-F'.....	31
図30	遺構外出土遺物(1).....	32
図31	遺構外出土遺物(2).....	33
図32	検出された遺構(畑・道・溝)と現況の地割りととの関係.....	36

写真図版目次

口絵1	1 遺跡俯瞰図	
	2 3号土坑(陥し穴)(南から)	
	3 5号土坑(南から)	
	4 高井東式土器	
	5 弥生前期土器	
口絵2	6 1号壱穴住居(南から)	
	7 1号壱穴住居 竈(南から)	
	8 1号壱穴住居出土 羽釜	
	9 2号壱穴住居(南西から)	
	10 2号壱穴住居出土 灰輪陶器	
	11 2号壱穴住居出土 灰輪陶器	
	12 江戸時代(天明三年) 畑・道・溝(南から)	
P L 1	遺構出土遺物	
P L 2	遺構外出土遺物	
P L 3	1 1号土坑セクション 南→	
	2 1号土坑全景 南→	
	3 2号土坑セクション 南→	
	4 2号土坑全景 南→	
	5 3号土坑および風筒水痕 南西→	
	6 3号土坑セクション 南→	
	7 3号土坑全景 南→	
	8 3号土坑底部ピット近接 南→	
P L 4	1 5号土坑セクション 南西→	
	2 5号土坑全景 南→	
	3 6号土坑セクション 西→	
	4 6号土坑全景 西→	
	5 弥生土器出土状況(奥壁は天明泥炭) 東→	
	6 旧石器試掘作業風景 北西→	
	7 基本土層(1)	
	8 基本土層(2)	
P L 5	1 1号住居検出作業風景 西→	
	2 1号住居セクションA-A' 南→	
	3 1号住居遺物・焼土層出土状況 南→	
	4 1号住居炭化材出土状況(焼土層除去後) 南→	
	5 1号住居遺物(1住・2・羽釜が主体) 出土状況 南→	
	6 1号畑全景 南→	
	7 1号住居カマドセクションC-C' 南→	
	8 1号住居カマドセクションD-D' 東→	
P L 6	1 1号住居遺物(1住・1・羽釜が主体) 出土状況 南→	
	2 1号住居カマド・右脇脇の土坑全景 南→	
	3 1号住居カマド・右脇脇の土坑全景 北→	
	4 1号住居P1セクション 南→	
	5 1号住居P1全景 南→	
	6 2号住居検出状況 東→	
	7 2号住居セクションA-A' 南東→	
	8 2号住居セクションA-A' 近接(1) 南東→	

P L 7	1 2号住居セクションA-A'近接(2) 南東→	
	2 2号住居セクションB-B' 北東→	
	3 2号住居遺物出土状況 南西→	
	4 2号住居遺物(2住・8・刀子) 出土状況 西→	
	5 2号住居遺物(2住・3・灰輪陶器) 出土状況 南→	
	6 2号住居埋土(2層)中の円溝メモ	
	7 2号住居黄色ローム土検出範囲 南→	
P L 8	8 2号住居全景 南西→	
	1 2号住居内床に敷られた石(2住・9)と腐痕 北西→	
	2 2号住居カマドセクションH-H' 南西→	
	3 2号住居カマドセクションI-I' 南東→	
	4 2号住居カマド遺物出土状況 南西→	
	5 2号住居カマド全景(カマド内壁の切石と裏込めの石) 南西→	
	6 2号住居カマド床下の厚い焼土層 南東→	
	7 2号住居カマド右脇脇土器の切石と上に乗った内壁の切石 南西→	
	8 2号住居カマドに使用された切石と接合状況メモ	
P L 9	1 2号住居貯蔵穴セクション 南西→	
	2 2号住居貯蔵穴全景 南西→	
	3 2号住居P1セクション 南西→	
	4 2号住居P1全景 南西→	
	5 2号住居P2セクション 南西→	
	6 2号住居P2全景 南西→	
	7 2号住居床下土坑セクション 南東→	
	8 2号住居床下土坑全景 南東→	
P L 10	1 1号畑土層全景 南→	
	2 天明泥炭除去前遺跡風景 北東→	
	3 畝サカタ状態確認トレンチセクションA-A' 北東→	
	4 泥炭厚測定ポイント1 北西→	
	5 泥炭厚測定ポイント2 北西→	
	6 泥炭厚測定ポイント3 北西→	
	7 泥炭下遺構検出作業風景 南東→	
	8 畑・道・溝全景(調査区拡張前) 南→	
P L 11	1 畑・道・溝全景(調査区拡張後) 南→	
	2 1号畑全景 北東→	
	3 1号畑検出作業風景 南西→	
	4 1号畑セクションC-C' 西→	
	5 1号畑全景(調査区拡張後) 南→	
P L 12	1 1号畑調査区拡張部畑検出作業風景 北東→	
	2 1号畑泥炭中の石の上に腐跡 西→	
	3 3号畑全景 西→	
	4 2号畑セクションD-D' 西→	
	5 1号道・1号溝全景 南東→	
	6 調査区南を東西に横切る古道(現道歩道) 北東→	
	7 吾妻川との比高差 西→	
	8 吾妻峠鹿飛橋 北→	

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の烏居峠に発し、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中、吾妻峡と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する一級河川である。

ハッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③都市用水の補給(水道用水・工業用水)などを目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高131m、流域面積3.04km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑ハッ場、右岸が同大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峡」の入口付近にあたる。名勝「吾妻峡」については、大正元年秋、地質学者志賀重昂氏が吾妻川の渓谷を九州の「耶馬溪」にも勝ると絶賛した。このことにより吾妻渓谷は関東の「耶馬溪」と言われるようになった。中でも東吾妻町松谷から長野原町地内ハッ場大橋付近までの約4kmの間は景観が最も良いことから、昭和10年12月24日の官報告示により、名勝「吾妻峡」として国の指定となった。ハッ場ダム建設工事も国の指定地内にかかることから建設省は昭和44年7月4日付けで「史跡名勝又は天然記念物の現状変更について」申請を行い、文化庁の同意を受けている。その後も手続きは継続されている。今回の発掘調査地も指定地内であるが、委託者である国交省により現状変更の申請及び文化庁同意を受けている地点である。

ハッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手後、平成4年7月、「ハッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

文化財関連では、昭和62年12月、「ハッ場ダム建

設に係わる現地調査に関する協定書」の調印が「長野原町長と関東地方建設局長との間で締結されるに先立ち、昭和61年7月からダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定に基づく民俗、石造文化財、自然、移設予定文化財、昔話、古文書、併せて埋蔵文化財の詳細分布調査が、国土交通省(建設省)からの委託事業として長野原町教育委員会の手により行われ、以下の報告書等が刊行されている。

- 上毛民俗学会編 1987『長野原町の民俗』長野原町
- 上毛民俗学会編 1989『長野原町の石造文化財』長野原町
- 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡-町内遺跡詳細分布調査報告書-』
- ハッ場ダム地域自然調査会編 1993『長野原町の自然』長野原町
- ハッ場ダム地域文化財調査会移設文化部 1995『ハッ場ダム地域移設予定文化財調査報告書』長野原町
- ハッ場ダム地域文化財調査会昔話部編 1997『長野原町の昔話』長野原町
- ハッ場ダム地域文化財調査会古文書調査部編 2001『長野原町の古文書』

このうち、文化庁補助事業として、昭和62年度より3ヶ年計画で、群馬県教育委員会文化財保護課の指導の下、長野原町教育委員会が実施した遺跡分布調査の報告(『長野原町の遺跡-町内遺跡詳細分布調査報告書-』)によれば、確認された埋蔵文化財包蔵地は182、これに石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物を含めた文化財総数は199を数える。ハッ場ダム建設に関係する5地区(川原畑・川原湯・林・横壁・長野原)の埋蔵文化財調査対象面積は約57万m²、その後、平成14年に11遺跡、平成16年に2遺跡、平成17年に1遺跡を加えた調査対象遺跡は61遺跡で面積は約110万m²となった。

また下流の東吾妻町松谷、三島地区などでもダム建設の関連工事が進展しつつある。この地域は群馬県教育委員会の「群馬県遺跡地図(昭和48年)で遺跡の存在が確認され、群馬県教育委員会作成の文化財情報システムWEB版(08.1.15現在)によれば、三島地区で18遺跡、松谷地区で2遺跡を数える。

このような状況の中、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議が行われ、平成6年

第1章 調査の経過と方法

3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査を実施することが決定したのである。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書(第1回変更)」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。また平成17年4月1日に同協定書(第2回変更)が締結され、発掘調査の業務完了期日が「平成18年3月31日」から「平成23年3月31日」まで延長された。

上郷西遺跡は、当初周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかった。しかし、当地は遺跡の可能性の高いことから県教委は試掘調査が必要であることを国交省に伝えていた。平成12年度の建設省ハッ場ダム工事事務所・群馬県教育委員会文化財保護課・当事業団で毎月実施しているハッ場ダム埋蔵文化財調査調整会議において、町道新井横谷松谷線工事に伴う東吾妻町大字三島地内の試掘調査の依頼があり、平成12年9月13日に群馬県教育委員会文化財保護課により試掘調査を実施した。結果、事業地内の西部分の平坦

面上には、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物に埋没した畑跡が良好な遺存状態で分布していることが確認され、本格的な発掘調査の必要性があるとの判断がなされた。遺跡の確認に伴い、県教育委員会は町教育委員会と遺跡名について協議を行い、「上郷西遺跡」と命名した。

平成12年度試掘調査以降発掘調査の実施について、県教委と国交省で協議を進めてきたが、仮設工事用道路であることから、工事の進捗との調整を図る必要があった。平成18年度調整会議において、工事との調整が整い、仮設工事用道路のうち調査対象地の盛土を除去し調査を実施することとなった。平成19年4月2日付け群環八第21-1号で文化財保護法第92条を届出し、平成19年4月9日付け文第7205号で群馬県教育委員会より発掘調査の指示を受けた。本格的な発掘調査は、平成19年5月8日に開始された。調査区は、これまで仮設の工事用道として使用されていた路線内域であり、調査はその工事用道路を南側(山側)へ全長約200mに渡って切り直し、旧工事用道路を撤去した後、実施される予定であった。しかし、実際の切り直し道路の全長は約80mと予定の1/3程度にとどまり、その結果、予定されていた2,900㎡の調査面積は、1,085㎡に縮減されることとなった。また、用地契約の関係から、発掘調査区は同時に一括で調査を実施することができず、約8m幅の道路本体部分、その北側の約4m幅の道路路面部分、道路西端部分の3区画を時間差を置いて調査することとなった。結果、検出した1号畑・1号溝・1号道については、遺構を2～3区画に分割して全景写真撮影や平面図測量等を実施することとなった。発掘調査は、天明三年泥流下の遺構確認面、平安時代の遺構確認面、縄文時代の遺構確認面(2次堆積ローム層を挟んで上下2面)による4面調査、並びに旧石器試掘調査を実施し、6月15日に調査を終えた。整理作業は、平成20年1月から3月末までの3ヶ月間に遺物接合・復元、遺物実測・拓本作成、トレース、遺構図修正、図版作成等の作業を行い、平成20年度、報告書刊行に至った。

発掘調査日誌抄録

平成19年度(2007年)

5. 8 発掘調査開始(バックホー使用し、天明三年泥流除去作業)
5. 10 遺構確認調査実施、泥流下畑(1・2号畑)、溝(1号溝)、道(1号道)検出
5. 14 道路本体部分の泥流下畑等、高所作業車により撮影実施
5. 15 道路本体部分の2面目及び3面目調査実施(バックホー使用)
5. 16 2面目より1号焼土、1号住居検出、3面目より1・2号土坑検出
5. 18 1号住居、1・2号土坑調査実施
5. 21 70XC-22グリッド、70XD-20グリッドにて旧石器試掘調査実施
5. 28 道路本体部分の4面目調査開始、3・4号土坑検出、調査実施(後に4号土坑は風倒木痕と判断し、欠番とする)
5. 29 道路法面部分の用地解決に伴い、バックホー使用し、泥流除去作業実施
1号畑、1号溝、1号道の拡張部分を検出、調査実施
5. 30 道路法面部分の東端の2面目調査実施、弥生土器出土
6. 4 道路西端部分の用地解決に伴い、バックホー使用し、泥流除去作業実施、1号畑の拡張部分を検出
6. 5 2号住居検出、調査開始
6. 6 道路法面部分・道路西端部分の泥流下遺構(1・2号畑、1号溝、1号道の拡張部分)、高所作業車により撮影実施
6. 13 2号住居床下より、5号土坑検出、調査実施
6. 14 6号土坑検出、調査実施
6. 15 埋戻し作業実施、調査終了

第2節 調査の方法

上郷西遺跡(以下、「本遺跡」と略す)は、調査区南側(山側)で90～140cm、北側(吾妻川側)で40～100cmの厚さで、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物に覆われていた。その泥流下には、畑遺構の存在が試掘調査により確認されていたため、まず、バックホーを使用することにより、泥流堆積物の除去作業を実施した。その後、作業員を導入し、ジョレンや移植ゴテによる遺構の検出作業、並びにトレンチ掘削や載ち割り作業により、遺構調査を行った。

2～4面目の検出に際しても、その都度、バックホーを使用した。2面目では平安時代の焼土跡1基、堅穴住居跡2軒、土坑2基、3面目では、縄文時代の土坑2基、4面目では縄文時代の土坑(陥し穴)1基を検出するに至った。堅穴住居の調査は、埋没土層堆積状況の観察用ベルトを任意に設定して残し、移植ゴテ等により掘削を行った。土坑の調査は、埋没土層堆積状況を観察するため、基本的に、半載作業により調査を実施した。焼土跡の調査は、焼土の厚みや下層の状況を観察するため、サブトレンチを利用して調査を実施した。

旧石器試掘調査は、70XC-22グリッドと70XD-20グリッドにおいて、3m四方の正方形のトレンチを設定し、調査を実施した。

遺物取り上げについては、分布範囲の地点的な集約を想定し、4mグリッド一括取り上げ、及び地点別取り上げを適宜行った。

遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル平板測量を基本として、縮率1/10・1/20・1/40・1/100・1/200を選択して行った。

遺構断面測量も平面測量に準じた。

遺構写真については、地上写真並びに高所作業車使用による高所写真撮影を現場担当者が行った。撮影には、デジタルカメラ(Canon EOS Kiss Digital N)と6×7版白黒フィルムを使用した。

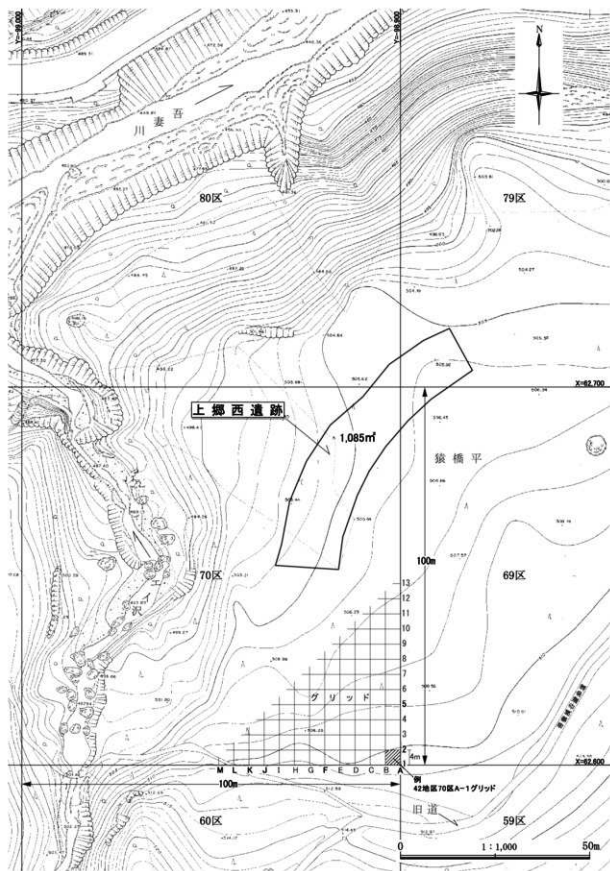


図1 遺跡位置及びグリッド設定図

第3節 調査区の設定

平成6年度から始まったハッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて「ハッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し必要部分について掲載する。

①調査における遺跡番号は、ハッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）、東吾妻町の大字3地区（6：三島、7：大柏木、8：松谷）に番号を付し、ハッ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイファン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。上郷西遺跡は「YD6-04」である。

②基準座標は、国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）に基づく日本平面直角座標第Ⅸ系を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点（座標値 $X=+58000.0, Y=-97000.0$ ）とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo42に所在する。

③1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。

本遺跡の場合、No42地区の69区・70区・79区・80区の4グリッドの交点が調査区内に存在するため、留意されたい。

「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA

～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は地区番号を略して用いている。

第4節 基本土層

本遺跡の基本土層は、調査区域の西寄りの地点、No42地区70区C18グリッド（1期調査道路本体部分掘削時の西壁に相当する）において、断面実測及び

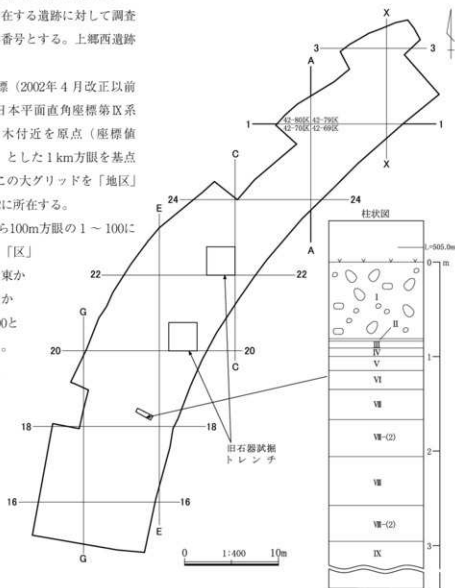


図2 基本土層及び旧石器試掘位置図

第1章 調査の経過と方法

観察を行ったものである。I層の泥流堆積物は、本遺跡が位置する平坦面の南側(山側)で90~140cmと厚く、北側(吾妻川側)で40~100cmと比較的薄く堆積している傾向がある。また、VI層がローム質土の2次堆積層であり、その上下面で、縄文時代に相当する遺構確認面が2面存在する。

I層：暗褐色土 (10YR3/3)

天明三年浅間山噴火に伴う泥流堆積物層。径10~30mmの礫20~30%混入。

II層：浅間A軽石 (As-A)

発泡の良い径最大5mm程度の白色軽石。径1~3mm大を中心とする。鉄分の沈着により、部分的に赤味を帯びる。

III層：黒褐色土 (10YR2/3)

天明三年当時の耕作土層。鉄分が赤色に沈着している。

IV層：暗褐色土 (10YR3/3)

天明三年当時の耕作土層。径10~30mmの礫10~20%と比較的多く混入する。

V層：暗褐色土 (10YR3/4)

2面目の平安時代に相当する遺構確認面。砂質でIV層土より礫の混入少なくなる。

VI層：褐色土 (10YR4/6)

3面目の縄文時代に相当する遺構確認面。ローム質土の2次堆積層。やや土質締まり、粒子細かい。黒色土をブロック状に20~30%混入する。

VII層：褐色土 (10YR4/4)

やや土質締まり、粒子細かい。炭化粒1~3%、浅間草津黄色軽石(As-YPk)粒1~3%混入する。

VII-(2)層：暗褐色土 (10YR3/3)

やや土質締まり、粒子細かい。YPk粒3%混入。

VIII層：黄褐色土 (10YR5/8)

4面目の縄文時代に相当する遺構確認面。締まり強くなる。砂質土。YPk粒3~5%混入。径10~20mmの礫5~10%混入。

VIII-(2)層：黄褐色土 (10YR5/6)

VIII層土より砂質。YPk粒5~7%混入。礫の混入

少なくなる。

IX層：黄褐色土 (2.5Y5/6)

砂礫層。径30~50mmの礫20~30%混入。

参考文献

- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』第287集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『ハッ塘ダム発掘調査集(1)』第303集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中棚II遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005『川原湯勝沼遺跡(2)』第356集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006『立馬II遺跡』第375集
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『三平I・II遺跡』第401集

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

上郷西遺跡は群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島に所在する。

東吾妻町は、群馬県北西部、吾妻郡内にあり、東は渋川市、西は長野原町と六合村、南は高崎市、北は中之条町と隣接する。面積は約254km²。町域の北には吾嬬山(1181.5m)・岩櫃山(802.6m)・薬師岳(974.4m)、西には浅間山(1756.7m)、南には榛名連山掃部ヶ岳(1449m)などがそびえ、周囲には1,000m級の峰々が連なっている。嬬恋村鳥居峠付近を源流とする一級河川の吾妻川が町域のほぼ中央部を東流し、温川・雁ヶ沢川・深沢川・泉沢川などの多くの支流を集めながら渋川市で利根川に合流する。吾妻川は長野原町との町境付近で、地学者志賀重昂により、「関東の耶馬溪」と称された名勝「吾妻峽」を織り成している。旧東村域には、「日本名水百選」に選定された箱島湧水もあり、東吾妻町は、水と緑に恵まれた自然豊かな町である。

東吾妻町はこれまで、幾度となる町村合併を経て今日に至っている。ここではその沿革を簡潔にまとめておく。まず、1889年(明治22)、町村制施行により、松谷(明治8年:松尾と横谷の両村合併による)・岩下・矢倉・郷原・厚田・三島の6ヶ村が合併により岩島村となる。1955年(昭和30)、原町・岩島・太田・坂上の一町三村が合併し原町となり、翌年、吾妻町と改称。2006年(平成18)3月、吾妻町と東村とが合併し、東吾妻町となった。

町域の地質形成に大きな影響を与えた火山には浅間山がある。本遺跡から南西約25km離れた長野県境に位置し、古い方から黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。浅間山は、約2.1万年前の黒斑火山の噴火で、山体崩壊によって「応桑泥流」(前橋・中之条・塚原・塩沢泥流とも呼称される)を発生させた。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、

その後の浸食によって吾妻川兩岸に河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多くの火山噴出物を堆積させ、浅間草津黄色軽石(As-YPk:1.3~1.4万年前)の堆積は顕著である。また浅間Bテフラ(As-B:1108年)や浅間柏川テフラ(As-Kk:1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認できる。さらに天明三年(1783年)の噴火により発生した泥流は、吾妻川沿いの中・下位の段丘面を中心として数m~数十cmの厚さで覆っている。

本遺跡は標高約500m。吾妻峽出口の右岸に開けた平坦地上に位置する。西側のエイ沢、東側の十二沢という二筋の吾妻川支流の沢に挟まれており、旧地名を「猿橋平(さるはしだら)」という。三島村天明三年泥入図(岩島村誌)によれば、現在のエイ沢はイイ沢とあるが、猿橋は沢より吾妻川上流の現在の鹿飛橋(吾妻峽の観光名所)付近に描かれている。また、道はやや南側の山側に近い場所を東西に横切っているように描かれ、天明泥流はその道をほぼ覆うように描かれている。道は西へは、イイ沢を渡り猿橋へと延びている。現在、発掘調査区の約70~80m南には、東西に延びる吾妻渓谷遊歩道がある。この道は、西へはイイ沢を渡り、鹿飛橋へと繋がっている。これは絵図と一致する。ということは現遊歩道は旧道の名残りであり、猿橋が架けられていた位置も、現鹿飛橋の位置に近い可能性が高い。「猿橋平」という旧地名も、この橋の所在と関連があるのだろう。現在の土地の区割りも、この道を基準に



図3 三島村天明三年泥入図(岩島村誌絵図第一を改定)

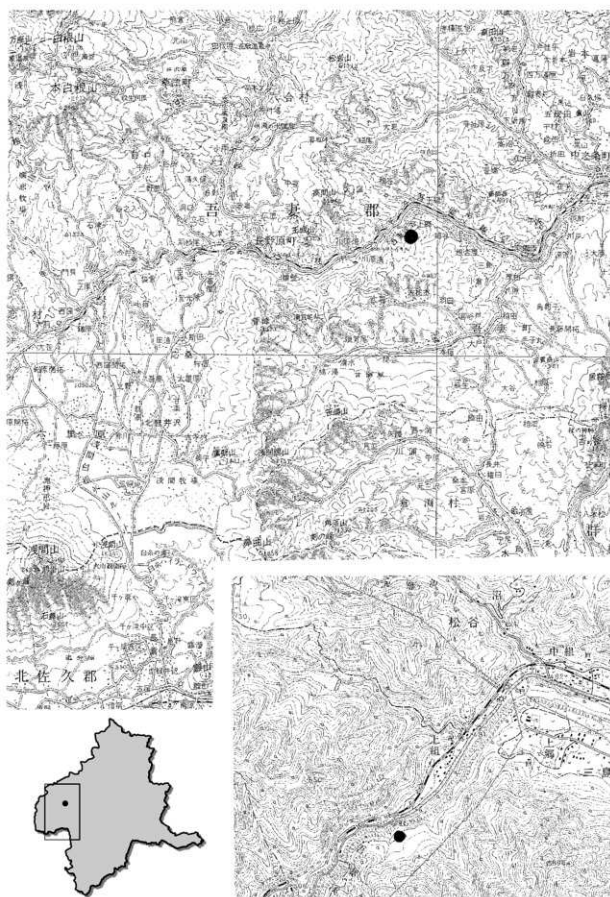


図4 遺跡位置図

して南北に短冊状に延びていることから、この道は、古来、主要道として位置付けられていたことが窺われる。

道跡は、天明泥流に40～140cmの厚さで覆われており、泥流下には浅間A軽石（As-A）の堆積が確認されている。

第2節 歴史的環境

前述したが、本道跡は旧岩島村内に所在する。ここでは、旧岩島村城の周辺道跡、及び吾妻峠を挟んで西に隣接する長野原町東部（大字川原畑・川原湯・林・横壁）の周辺道跡について概観する。

ただし、記載した道跡には、整理作業中或いは未報告、発掘調査中の道跡も多く、時期や遺構数等については不確定な部分もあるので留意されたい。

旧石器時代

→長野原町において該期の遺跡は依然確認されていないが、柳沢城跡の調査において細石器文化期に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパー1点が出土する。

→岩島地区において該期の遺跡は確認されていない。

縄文時代

●草創期・早期

→吾妻渓谷西側入口部の吾妻川左岸に位置する石畑岩陰遺跡では、表裏縄文・回転縄文・撚糸文・押型文などの土器群や獣骨などが出土している。平成16年調査の三平Ⅱ遺跡でも包含層より、同時期の土器片が多数出土している。平成12・13年調査の楡木Ⅱ遺跡では、撚糸文期の堅穴住居31軒が確認され、県内はもとより全国でも希少な調査例である。また平成14年調査の立馬Ⅰ遺跡でも早期住居2軒が確認されている。

→該期の遺跡は確認されていない。

●前期

→平成12・13年調査の楡木Ⅱ遺跡では黒浜式・有尾式～諸磯式期の住居12軒が確認されている。平成16・17年調査の三平Ⅰ遺跡では諸磯式期の住居2軒

が確認されている。

→小倉遺跡(大字三島沢尻地内)や上反遺跡(大字三島万木沢地内)において、関山式・諸磯式の土器片が出土している。昭和59年調査の郷原遺跡では関山式期の住居3軒が確認されている。

●中期～後期

→平成12・13・17年調査の楡木Ⅱ遺跡で五領ヶ台式・阿玉台式期住居4軒が確認され、幸神遺跡で完形の阿玉台式土器が出土した円形土坑1基が発見されている。平成14年調査の立馬Ⅱ遺跡で五領ヶ台式～阿玉台式期の住居9軒が確認された。中期後半以降になると、大規模集落遺跡として著名な横壁中村遺跡が挙げられ、中期後半加曾利E式期から後期中葉加曾利B式期にわたる住居250軒以上が確認されている。平成18・19年調査の上ノ平Ⅰ遺跡では、中期中葉の住居18軒、後期前半の住居6軒が確認されている。

→昭和19年調査の郷原遺跡では、後期のハート形土偶が出土し、昭和59年の調査では、中期勝坂式・阿玉台式・加曾利E式期の住居8軒が確認されている。平成14・19年調査の上郷岡原遺跡では、中期～後期の住居17軒が確認されている。

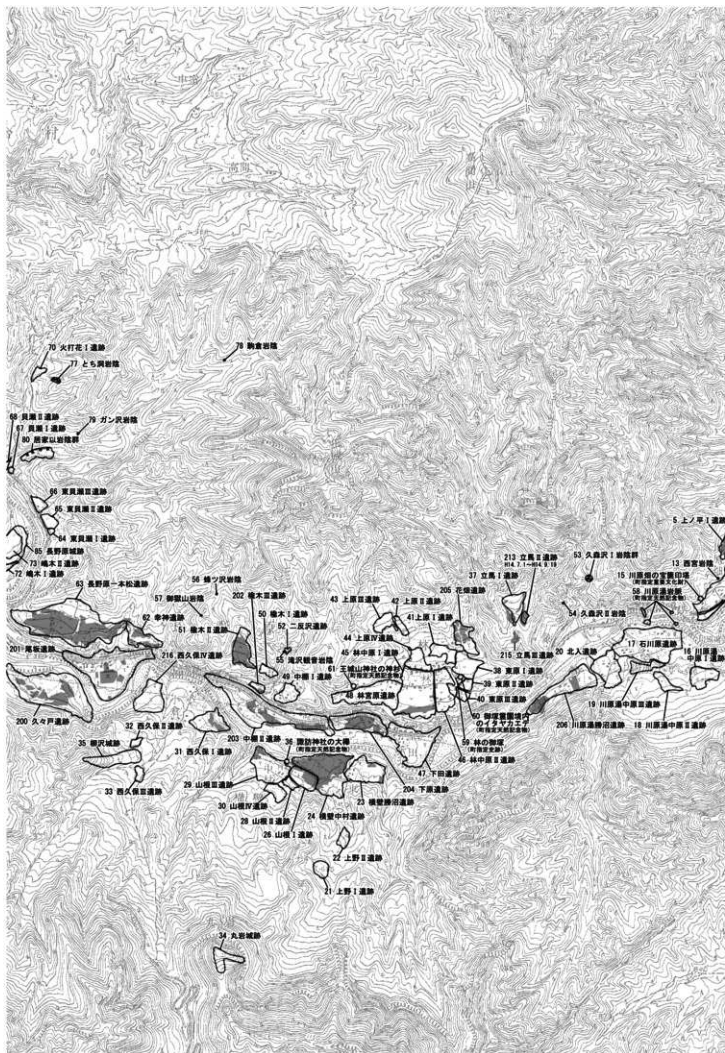
●晩期

→石畑Ⅰ岩陰では水Ⅰ式や安行式、千網式土器などが採集されている。平成16年調査の川原湯勝沼遺跡では水Ⅰ式併行の浮線文系の甕と在地型突帯文壺型土器が2基並立して埋設されており、再葬の可能性が高い。平成14年調査の立馬Ⅰ遺跡では中部高地における晩期終末女鳥羽式期の住居1軒が確認されている。また平成15年調査の横壁中村遺跡でも晩期終末に帰属する可能性のある住居2軒も調査されている。

→昭和55年調査の唐堀遺跡では、後期後半高井東式から晩期前半安行Ⅲc式にかけての遺物が出土している。

弥生時代

→依然として調査例は少ないが、横壁中村遺跡では東海西部桑痕文土器椀式の甕を埋設する土坑1基



が確認されている。また平成14年調査の立馬Ⅰ遺跡では中期前半～中葉の住居1軒、中期後半の住居1軒と土器棺墓2基が検出されている。

→昭和13・14年、明治大学杉原莊介氏による調査の岩櫃山麓の果岩除が有名である。再葬墓址として、また、中期前半土器編年の標式遺跡として重要な位置を占めている。昭和62年調査の前畑遺跡では、中期前半の再葬墓と考えられる土坑9基が検出され、良好な資料を伴出している。

古墳時代

→依然として調査例は少ないが、平成15年調査の林宮原Ⅱ遺跡では5世紀末～6世紀初頭の住居1軒、平成16年調査の下原遺跡でも同時期の住居1軒が確認されている。平成16年調査の川原湯勝沼遺跡でも同時期の土師器を伴う土坑1基、遺構外からは剣形石製模造品が出土している。

→上毛古墳総覧によれば、吾妻郡内には274基の古墳があり、岩島地区にはそのうちの46基があるとされている。四戸・生原古墳群、机古墳は古墳時代後期6世紀代のものが主体である。昭和33年県指定史跡の姉山「石組かまじ」もある。

奈良・平安時代

→奈良時代に該当する遺跡は羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに原始古代の中心をなす時期である。平成12・13・16・17年調査の榎木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居34軒が検出され、「長」・「三家」の墨書土器や「称」と刻字された紡錘車も出土し注目される。平成14・15・17・18年調査の横壁中村遺跡では9世紀中葉～10世紀初頭の住居19軒を確認し、1軒は焼失住居であるとともに床面の一部が板敷きであることが確認され注目に値する。平成6・7・8・9・10・11・13・14・15年調査の長野原一本松遺跡では12軒(9世紀後半～11世紀?)、平成10・11・12年度調査の花畑遺跡では3軒、平成14年調査の立馬Ⅰ遺跡では4軒、平成16年調査の川原湯勝沼遺跡では9世紀の住居3軒、平成18・19年調査の上ノ平Ⅰ

遺跡では9世紀～10世紀の住居27軒が確認されている。

→平成13・14・15・18・19年調査の上郷岡原遺跡では、9世紀後半～10世紀前半の住居14軒、平成13・14年調査の上郷B遺跡では、10世紀第Ⅰ四半期の住居1軒が確認されている。

中世

→吾妻川流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡、長野原城跡、丸岩城跡、柳沢城跡、金花山砦跡などがあり、その他に林城跡、林の烽火台などといわれる箇所も存在する。金花山砦跡は、平成12年に町教委と群馬県埋蔵文化財調査事業団により掘削などが確認されている。掘立柱建物の検出も近年増加しており、平成11・12・13・17年調査の横壁中村遺跡では18棟、平成12・15・17年調査の榎木Ⅱ遺跡では石垣区画されたテラスを伴う掘立柱建物が十数棟、平成15年調査の長野原一本松遺跡では2棟、平成16年調査の三平Ⅱ遺跡では、7棟の掘立柱建物が確認されている。また、平成19年調査の林中Ⅰ遺跡では、林城跡の調査が行われ、郭跡や37棟の掘立柱建物などが確認された。

→西吾妻と東吾妻を分断する吾妻峽を迂回するには道陸神峠を越える必要がある。道陸神峠とその東の玄関口にあたる松谷地区雁ヶ沢の要害を預かり受けていたのが、信州温野一族の横谷氏である。東には、齋藤氏の岩下城、また、吾妻川の対岸、三島地区には、天文・弘治年間に江見氏を城主とした根古屋城跡もある。そして東端に、齋藤憲広から真田氏へと受け継がれていく岩櫃城跡がある。平成14年調査の上郷岡原遺跡では、中世の掘立柱建物16棟が確認されている。

近世

→下位・中位段丘面で、天明三年浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見されている。これらの遺跡では畑跡・礎石建物跡・ヤククラ・道・石垣・溝・井戸などが検出され、天明泥流に埋まった景

第2章 遺跡の環境

表1 周辺遺跡一覧表(1)

所在大字	町道跡番号	遺跡名	YD番号	調査年度 ●地盤調査 ◇試掘調査																		遺構、遺物の時期	備 考
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19						
川原塚	206	東宮遺跡	YD402	●														◇	近世	H7～9を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
川原塚	210	石塚遺跡	YD403	◇	◇	◇	●												縄文・弥生・近世	H8～9・10を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
川原塚	3	三平ノ遺跡	YD404					◇											縄文・弥生・平安	H10を普賢文433集(八ノ場2集)、H16・17を普賢文493集(八ノ場13集)で報告			
川原塚	11	二村平野遺跡				◇	◇												不明				
川原塚	4	三平ノ遺跡	YD406																縄文・平安・中世	H16を普賢文401集(八ノ場13集)で報告			
川原塚	5	上ノ平ノ遺跡	YD407							◇									縄文・平安	H18を普賢文440集(八ノ場23集)で報告			
川原塚	1	湯井ノ遺跡																	縄文・平安				
川原塚	2	湯井ノ遺跡																	縄文				
川原塚	6	上ノ平ノ遺跡																	不明				
川原塚	7	西宮遺跡	YD408															◇	縄文				
川原塚	8	湯沢岩部																	縄文				
川原塚	9	石塚ノ岩部																	縄文				
川原塚	10	石塚ノ岩部																	不明				
川原塚	12	三ツ堂岩部																	不明				
川原塚	13	西宮岩部																	不明				
川原塚	209	二村平野遺跡	YD405	◇		◇		◇											縄文・平安・近世	H8～10を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
川原塚	16	川原塚中屋ノ遺跡																	縄文				
川原塚	17	石川原遺跡																	縄文				
川原塚	18	川原塚中屋ノ遺跡																	平安				
川原塚	19	川原塚中屋ノ遺跡																	縄文・平安				
川原塚	20	北ノ遺跡																	縄文				
川原塚	206	川原塚勝沼遺跡	YD301					●											縄文・古墳・平安・近世	9を普賢文303集(八ノ場2集)、H15・18を普賢文366集(八ノ場6集)で報告			
川原塚	212	西ノ上遺跡	YD302																近世	H14を普賢文349集(八ノ場4集)で報告			
川原塚	207	金花山岩部																	中世				
練野	23	練野勝沼遺跡	YD301	●	●														縄文・弥生・平安・中世・近世	H6・7を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
練野	31	西久保ノ遺跡	YD302	◇				●	●	◇								◇	縄文・弥生・平安・中世・近世	H11・12を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
練野	24	練野中村遺跡	YD303			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・弥生・平安・中世・近世	天明前を普賢文319集(八ノ場3集)、縄文中期住居を普賢文325・368・381・406集(八ノ場5・7・10・14集)、土器を普賢文436集(八ノ場20集)、掘立遺物・列石等を普賢文439集(八ノ場22集)で報告			
練野	29	山根ノ遺跡	YD304																縄文・弥生・平安・近世	H10を普賢文433集(八ノ場2集)、H13・18を普賢文429集(八ノ場17集)で報告			
練野	21	上野ノ遺跡																	縄文・平安				
練野	22	上野ノ遺跡																	平安・近世				
練野	26	山根ノ遺跡								●									平安				
練野	28	山根ノ遺跡																◇	平安・近世				
練野	30	山根ノ遺跡																	縄文・平安				
練野	32	西久保ノ遺跡																	平安				
練野	33	西久保ノ遺跡																	不明				
練野	34	九折城跡																	中世				
練野	35	湯沢城跡																	中世				
練野	216	西久保ノ遺跡																	近世				
林	47	下田遺跡	YD401	◇	●		◇												縄文・近世	H6・7・9を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
林	41	上原ノ遺跡	YD403				◇												縄文・平安・近世	H9を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
林	265	花塚遺跡	YD405							●	●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・平安	H10～12を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
林	202	榎木宮遺跡	YD406																縄文・弥生・平安・中世	H10を普賢文433集(八ノ場2集)で報告			
林	203	中郷ノ遺跡	YD407																近世	H11～13を普賢文319集(八ノ場3集)、H15を普賢文349集(八ノ場4集)で報告			
林	204	下原遺跡	YD408																古墳・平安・中世・近世	H12・13を普賢文319集(八ノ場3集)、H16・17を普賢文389集(八ノ場12集)で報告			
林	51	榎木ノ遺跡	YD409																縄文・平安・中世	平安時代・中世を普賢文433集(八ノ場18集)で報告			
林	52	二反沢遺跡	YD410																中世・近世	H12を普賢文379集(八ノ場9集)で報告			
林	37	立馬ノ遺跡	YD411																縄文・弥生・平安・中世・近世	H14・17を普賢文388集(八ノ場11集)で報告			
林	213	立馬ノ遺跡	YD412																縄文・弥生・平安	H14を普賢文375集(八ノ場8集)で報告			
林	44	上原ノ遺跡	YD413																縄文				
林	45	林の中ノ遺跡	YD414																縄文・平安・中世	H13を普賢文429集(八ノ場17集)で報告			
林	46	林の中ノ遺跡	YD415																縄文				
林	42	上原ノ遺跡	YD416																平安				
林	59	林の榎屋	YD417	◇			◇												縄文・近世	H7～10を普賢文303集(八ノ場2集)で報告			
林	215	立馬宮遺跡	YD418																縄文・平安				
林	38	栗原ノ遺跡	YD421																縄文・平安・近世				
林	39	栗原ノ遺跡	YD419																縄文				
林	40	栗原ノ遺跡	YD420																平安・近世				
林	43	上原ノ遺跡																	平安				
林	48	林宮原遺跡																	縄文・古墳・平安				
林	49	中郷ノ遺跡																	縄文・近世				
林	50	榎木ノ遺跡																	縄文・平安				
林	53	九折ノ岩部																	不明				

表2 周辺遺跡一覧表(2)

所在地	町道跡番号	遺跡名	YD番号	調査年度 (●:発掘調査 ○:試掘調査)															遺跡・遺物の時期	備考	
				6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19				
林	54	久森沢Ⅱ首筋																		不明	
林	55	高沢首筋																		不明	
林	56	神ノ首筋																		縄文	
林	57	綱結山首筋																		不明	
長野原	63	長野原一本松遺跡	YD6-01	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・平安・中世・近世	16～8を縄文297集(八ヶ場1集)、19～11を縄文408集(八ヶ場15集)、112・13を縄文433集(八ヶ場19集)、314を縄文441集(八ヶ場28集)で報告
長野原	201	尾原遺跡	YD6-02	◇	◇			●										●	●	近世	166-7-10を縄文300集(八ヶ場2集)で報告
長野原	200	久ヶ戸遺跡	YD6-03		●		●	●	●					●						縄文・近世	117を縄文230集、119～11を縄文319集(八ヶ場5集)、115を縄文339集(八ヶ場4集)で報告
長野原	62	中野遺跡	YD6-04			●	●						●					●		縄文・平安・近世	118-9-14-17を縄文429集(八ヶ場17集)で報告
三島	57	上郷山遺跡	YD6-01								●	●								縄文・古墳・平安・近世	113-14を縄文379集(八ヶ場9集)で報告
三島	95	上郷原遺跡	YD6-02							◇		●	●	●	●	●	●	●	●	縄文・弥生・平安・中世・近世	114-16を縄文410集(八ヶ場16集)、114・16～18を縄文438集(八ヶ場21集)で報告
三島	17	上郷入遺跡	YD6-03										●					●		縄文・古墳・平安	115を縄文349集(八ヶ場4集)で報告
三島	58	上郷西遺跡	YD6-04															●		縄文・平安・近世	119を本書、縄文448集(八ヶ場25集)で報告
三島	58	大沢遺跡	YD6			◇														縄文・平安・近世・近代	
大船木	96	原石入遺跡	YD7-01									●								中世・近世	113を縄文379集(八ヶ場9集)で報告
大船木		大船木上ノ沢遺跡	YD7			◇															
松原		松原原田遺跡	YD8			◇															

観の復元や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造などに関して詳細な検討がなされている。平成18年調査の尾坂遺跡では東西約13m×南北約7mの礎石建物跡、平成19年調査の東宮遺跡では東西約20m×南北約12mの礎石建物など、大型の屋敷跡の検出が相次いでいる。

→平成14年調査の上郷原遺跡では、麻畑とともに、12m×6.5mと16m×8mの礎石建物跡が見つかっている。

参考文献

- 岩鳥村誌編集委員会 1971『岩鳥村誌』
吾妻町教育委員会 1983『唐坂遺跡』
吾妻町教育委員会 1985『郷原遺跡』
吾妻町教育委員会 1998『前畑遺跡』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』第287集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2002『八ヶ場ダム発掘調査集(1)』第303集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2003『久ヶ戸遺跡・中郷Ⅱ遺跡・下原遺跡・橋塚中村遺跡』第319集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2005『川原湯湯沼遺跡(2)』第356集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2006『立馬Ⅱ遺跡』第375集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2006『立馬Ⅰ遺跡』第388集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』第401集
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2007『上郷原遺跡(1)』第410集

- 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
八ヶ場ダム地域自然調査会編 1993『長野原町の自然』
長野原町
上毛民俗学会編 1987『長野原町の民俗』
新井房夫編 1993『火山災害考古』
長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2000『年報19』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2001『年報20』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2002『年報21』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2003『年報22』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2004『年報23』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2005『年報24』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2006『年報25』
財団法人 群馬県縄文文化財調査事業団 2007『年報26』

第3章 縄文～弥生時代の調査

第1節 検出された遺構と遺物

縄文時代の土坑3基(うち1基は陥し穴)、弥生時代前期の土坑1基、時期不明(平安住居に切られる)の土坑1基を検出した。

(1) 土坑

1・2号土坑は、基本土層VI層の上面で、3号土坑(陥し穴)はVII層の上面で、5・6号土坑は2号住居(9世紀後半～10世紀前半)に切られる形で床下より検出した。

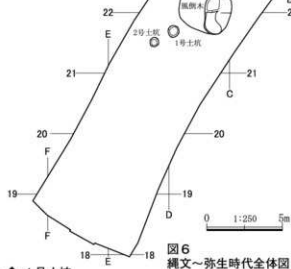


図6 縄文～弥生時代全体図

◆ 1号土坑

位置 70区C-21グリッド

形状 規模は長径80cm×短径68cm×深さ18cmで、形状はほぼ円形である。壁は丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。

時期 遺物の出土はないが、検出面から判断して縄文時代に比定される。

表3 2号土坑遺物観察表

遺物番号	PL	器種	部位	残存状況	出土位置	①色調 ②硬さ ③胎土	彫形・文様・整形等の特徴	時期・型式
2土-1	1	深鉢	胴部	破片	2号土坑	①褐色(7.5YR4/4) ②良好 ③粒径最大3mmの白色砂粒と同程度の粗砂粒を多く含む。黒母片僅かに含む	結節状縄文を横位は左方向へ、縦位は下方向へ描く。内面は横位ナメ塗。ナメ肌残る。	阿玉台1a式(陥し式)

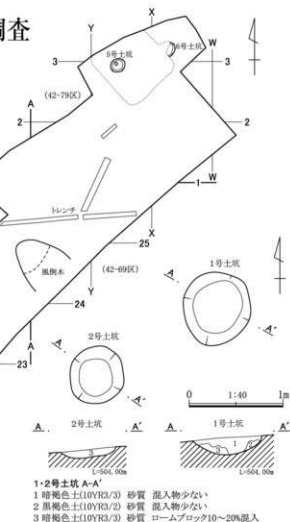


図7 1・2号土坑

◆ 2号土坑

位置 70区D-21グリッド

形状 規模は長径60cm×短径56cm×深さ8cmで、形状は円形である。浅く、壁も緩やかに立ち上がる。

時期 阿玉台1a式土器が1片(2土-1)出土していることから、縄文中期前半に比定される。



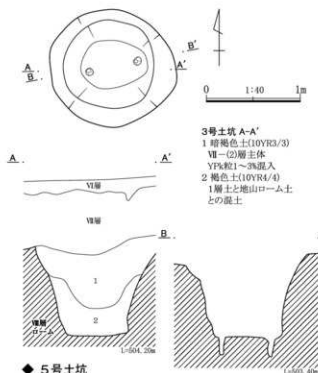
図8 2号土坑出土土器

◆ 3号土坑

位置 70KC-22グリッド

形状 規模は長径136cm×短径124cm×深さ92cmで、形状は上面・底面とも楕円形である。底面には長軸方向(ほぼ東西方向)に、深さ20cmのビットが2基並んで確認できる。本遺跡より約1km下流の上郷A遺跡(群埋文349集)の分類に従えば、I類(底面が楕円形、ビット有)またはII類(底面が円形或いは楕円形、ビット有、深い)に属し、長野原町の立馬I遺跡(群埋文388集)、三平I・II遺跡(群埋文401集)では、筒型と呼ばれる分類に属する。

時期 遺物の出土はないが、検出面から判断して縄文時代に比定される。



3号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3)
VII-(2)層主体
YPS粒1~3%混入
- 2 褐色土(10YR4/4)
1層土と地山ローム土との混入

図9 3号土坑

◆ 5号土坑

位置 79IX-2グリッド

重複 2号住居に切られる。

形状 規模は長径100cm×短径92cm×深さ30cmの円形土坑である。壁の立ち上がりもしっかりとしている。

表4 5号土坑遺物観察表

遺物番号	PL	器種	部位	残存状況	出土位置	①色調 ②織成 ③胎土	器形・文様・整形等の特徴	時期・型式
S土1a-1c	1	甕	肩部~胴部	破片	5土覆土 2住覆土	①黒褐色(10YR2/2) ②良好 ③径最大3mmの粗砂粒比較的多く含む	茶葉状工具によると考えられる細密条痕文(7.8本/17mm)を縦位、斜位に施文する。内面はミガキに近いナメ調整。	弥生前期

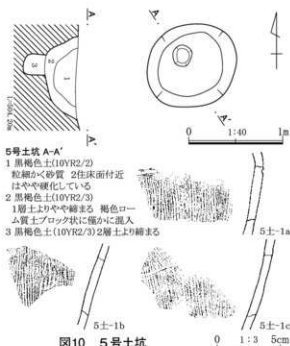


図10 5号土坑

5号土坑 A-A'

- 1 黒褐色土(10YR2/2)
粒細かく砂質 2住床面付近はやや硬化している
- 2 黒褐色土(10YR2/3)
1層土よりやや締まる 褐色ローム質土ブロック状に稀かに混入
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 2層土より締まる

る。底部の北西寄り部分に、径24cm×深さ20cmの規模の円形のビットをもつ。

時期 細密条痕文の甕と考えられる土器が3片(5土-1a~1c)出土していることから判断し、弥生前期に比定される。

◆ 6号土坑

位置 79JW-3グリッド

重複 2号住居に切られる。

形状 2号住居に西半分を切られるが、推定で径100cm×深さ26cmの円形土坑であろう。

時期 遺物の出土はない。平安時代以前。

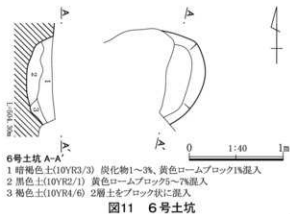


図11 6号土坑

6号土坑 A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物1~3%、褐色ロームブロック1%混入
- 2 黒色土(10YR2/1) 黄色ロームブロック5~7%混入
- 3 褐色土(10YR4/6) 2層土をブロック状に混入

第4章 平安時代の調査

第1節 検出された遺構と遺物

1 面目の天明三年泥流面より、約15～20cm下面の2面目（基本土層V層の上面）で、平安時代の9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡を2軒、焼土跡1基を検出した。

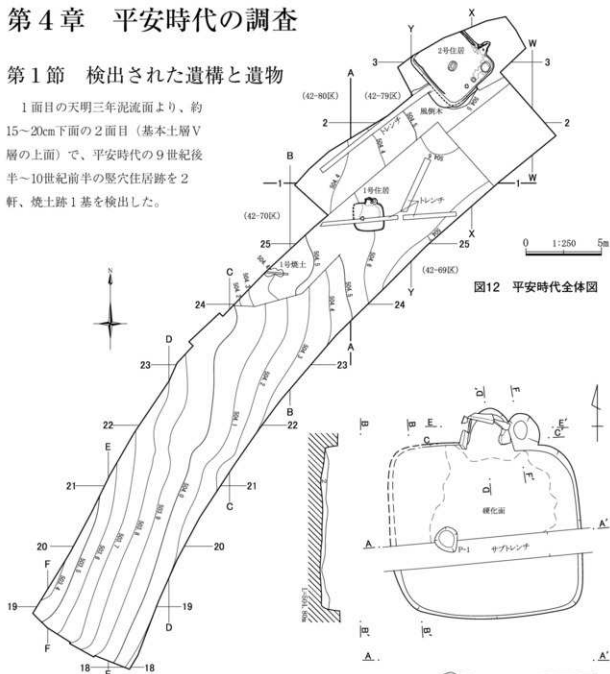


図12 平安時代全体図

(1) 竪穴住居跡

◆ 1号竪穴住居跡

位置 調査区の北東寄り、2号住居から約11m南西の69区Y-25グリッドに位置する。

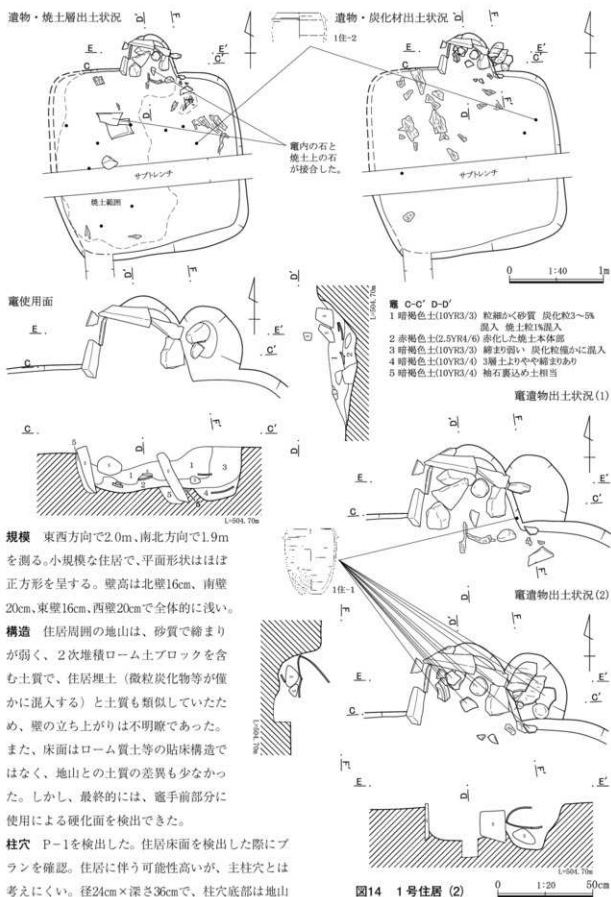
概要 竈の残存状況が良好で、竈右脇部分に確認できた土坑状の掘り込みの存在と、そこから出土した羽釜の胴部が竈内から出土した口縁部や底部と接合し、一個体のほぼ完形となったことが注目される。

方位 住居は真北を向いている。北竈をもつ。

1住 A-A' B-B'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 粒細かく砂質 炭化物1%焼土粒1%混入
上層部には一部に浅間船川デフラク(Au-Kk)ブロック状に混入する。
- 2 赤褐色土(2.5YR4/6) 焼土層 明瞭に赤化焼土化している
- 3 暗褐色土(10YR3/3) P-1埋土 住居の埋土1層土に土質類似炭化粒様かき混入

図13 1号住居 (1)



規模 東西方向で2.0m、南北方向で1.9mを測る。小規模な住居で、平面形状はほぼ正方形を呈する。壁高は北壁16cm、南壁20cm、東壁16cm、西壁20cmで全体的に浅い。

構造 住居周囲の地山は、砂質で締まりが弱く、2次堆積ローム土ブロックを含む土質で、住居埋土（微粒炭化物等が僅かに混入する）と土質も類似していたため、壁の立ち上がりは不明瞭であった。また、床面はローム質土等の貼床構造ではなく、地山との土質の差異も少なかった。しかし、最終的には、甕手前部分に使用による硬化面を検出できた。

柱穴 P-1を検出した。住居床面を検出した際にプランを確認。住居に伴う可能性高いが、主柱穴とは考えにくい。径24cm×深さ36cmで、柱穴底部は地山

のローム質土が硬化していた。

床下 床下は、基本土層のV層の地山で次第にローム土ブロックの混入増す。貼床や住居層方、床下土坑等は検出されなかった。

埋没状況 住居埋土の上層は、暗褐色土の自然堆積と考えられるが、埋土下層にはしっかりと赤化した焼土層が住居西寄りの部分を中心として面で広がり、部分的には厚さ10cmを測る。そして、焼土を除去すると、下面より炭化材が住居北西寄りの部分を中心に床面直上で出土した。炭化材の多くは焼土層に覆われており、土屋根構造を含めた住居の構造や建築部材を解明するための一資料となろう。

竈 住居北壁中央部や東寄りに、壁を掘り込んで構築される。石組みの竈である。東西両袖石は、大きさ・形状・厚さともほぼ同程度の切石で、どちらもやや西側へ傾いてはいるがしっかりと床面に差し込まれ、原位置を保っていると思われる。両袖石の間隔及び燃焼口の幅は約40cmである。更に、西側袖石の奥手煙道寄りには薄い平石が、東側袖石の奥手にはやや大きめの石が刺さっている。また、天井石と考えられる細長い形状の平石を含め、4～5個の石が竈内に落ち込んでいたが、原位置からは動いていると思われる。関連して、住居床面に分布した炭化材と焼土層の更上面から、天井石に形状が類似した平石が2～3点出土し、その1点が竈内出土の天井石の破片1点と接合した。炭化材や焼土が住居内に形成・堆積後、天井石の一部が動いて落ち込んだことになる。支脚石は検出されなかった。

竈右袖脇の土坑 竈右袖脇には地山の壁を掘り込んで、長径約40cm、短径約30cm、深さ約25cmの土坑を確認した。土坑壁に被熱の様子はなく焼土等の堆積も確認できないことから、作り替え以前の竈跡とは

考えにくい。土坑底部付近には径5～15cmの川原石が3～4個置かれ、羽釜(1住-1)の胴部が横位に据えられていた。この胴部は竈内出土の羽釜口縁部や底部と接合し、一個体のほぼ完成となった。このことから、竈と土坑は住居の施設として同時期に使用されていたこととなり、用途が注目される。

遺物 竈内より羽釜(1住-1)の口縁部や底部など、竈脇の土坑内より羽釜(1住-1)の胴部、住居埋土中より羽釜口縁部片(1住-2)が出土し、非掲載遺物では、土師器片16、須恵器片6、羽釜片4、縄文中期土器片11、縄文後期土器片10が出土した。

時期 出土遺物から、9世紀後半から10世紀前半に比定される。

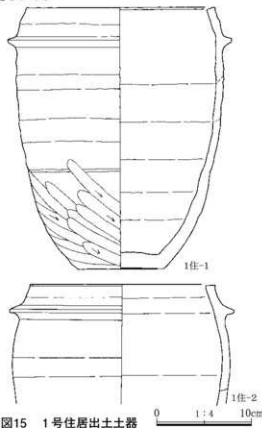
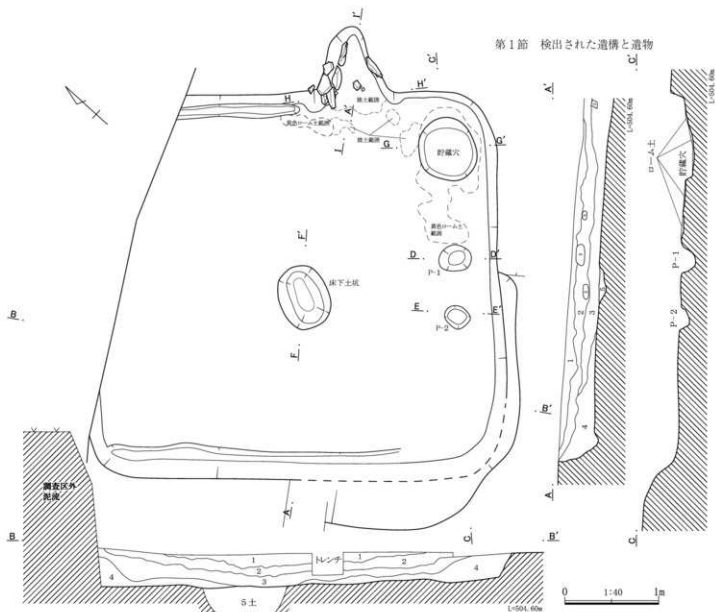


図15 1号住居出土土器

表5 1号住居遺物観察表

遺物番号	JL	器形・種類	残存状況	出土位置	法定1/100分目尺(単位:cm)			①色調 ②焼成 ③粘土	器形・成形・整形等の特徴	時期
					長さ	口径	底径			
1住-1	1	羽釜	同宗部の4点 (口縁部を約1/2欠損)	1住No.15-6-7 8-9-10-11-12 1住オマド覆土 1住壁土 1住壁方	276	(300)	90	①赤褐色 ②5YR4/3 外周淡色の葉面広い 内 周スス・コサ付着 ③赤 化色 やや焼成 ④体積 大5mmの粗粒砂を比較的多 く含む	胴は丁寧にナゲ調整を行い水平に作る。口 縁は内削し立ち上がるが、中段に漆の積 層を伴う。口内縁は平らに面取りし、内削 きする。胴部表面には4段の輪筋を施す。内 削が浅く、縁部のナゲ調整後、胴下半には 上から下方への斜削のへら削り。内面 には輪筋の凹凸が認められる。底部には極 少なケズリ痕とナゲ痕あり。	9世紀後半半 10世紀前半
1住-2	1	羽釜	破片	1住No.10-17	-	(300)	-	①赤褐色 ②5Y R6/3 ③焼成色 やや焼 成 ④体積大2mmの砂粒 をやや多く含むが1住1 よりは混入少ない	胴は丁寧にナゲ調整を行い水平に作る。口 縁は内削し立ち上がる。口内縁は平らに面 取りし、やや内削きする。口内縁部には 内削りの跡のみ出た粘土層が顕著に露出 胴部表面には輪筋の凹凸が認められる。縁 部は、縁部のナゲ調整、内面を傾斜したナゲ 調整。1住1と比較し、胴からは段までが 短く露出する器形には相対的である。	9世紀後半半 10世紀前半



◆ 2号壑穴住居跡

位置 調査区北端、1号住居から約11m北東の79区W・X-2・3グリッドに位置する。

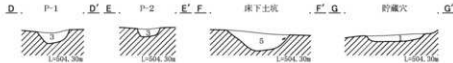
概要 1号住居或いは当該期の一般的な住居と比較すると、やや大型の住居である。住居内から多量に出土し接合した須恵器甕や猿投系折戸53窓の可能性のある灰軸陶器の椀、鉄製刀子や釘などの出土遺物が注目される。

方位 N-49°-E

重複 5号土坑(弥生時代)と6号土坑を切る。

規模 竈が作られた壁を東壁とすると、西壁4.3m、

- 2住 A-A' B-B' P-1 D-D' P-2 E-E' 床下土坑 F-F'
 1 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 船川テフラ(Ae-Kk)をブロック状に混入する砂質土 部分的には純層が残存する。株1~2cmのスコアア及び小礫1~5%混入
 2 黒褐色土(10YR2/2) 締まり1層土より強い 混入物少ないが人為的に投げ込まれたと思われる 径10~20cmの円礫(川原石)10~15個混入する
 3 暗褐色土(7.5YR3/3) ややローム質 炭化粒の混入15~20%と非常に多い 焼土粒も5~7%混入 炭化粒と焼土粒はほぼ均一に3層土全体に混入する
 4 暗褐色土(7.5YR3/3) 炭化粒・焼土粒の混入1~3%と少くなる
 5 赤褐色土(5YR5/6) 明るく赤化した焼土粒を主体とする。しかしローム土との混入であるため推入されたものと考えられる



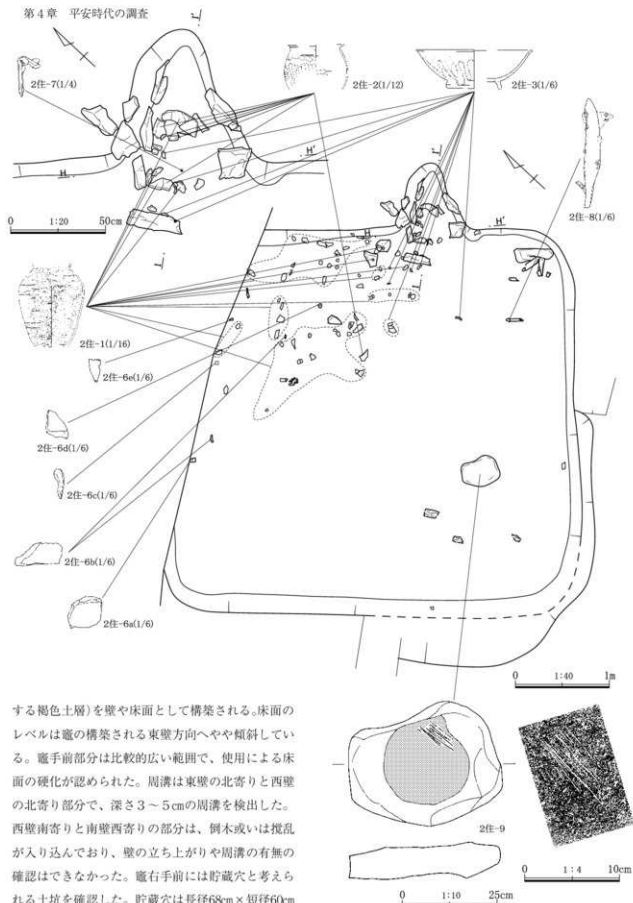
貯蔵穴 G-G'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 炭化粒と燻入ローム質土併せて5~7%混入 焼土粒混入しない

図16 2号住居

南壁4.1mを測り、北壁は調査区外のため検出には至らなかったが、平面形状は正方形を呈すると考えられる。壁高は東壁20cm、西壁40cm、南壁24cmである。

構造 基本土層VI層(2次堆積ローム土を多く混入



する褐色土層)を壁や床面として構築される。床面のレベルは竈の構築される東壁方向へやや傾斜している。竈手前部分は比較的広い範囲で、使用による床面の硬化が認められた。周溝は東壁の北寄りと西壁の北寄り部分で、深さ3～5cmの周溝を検出した。西壁南寄りと南壁西寄りの部分は、倒木或いは攪乱が入り込んでおり、壁の立ち上がりや周溝の有無の確認はできなかった。竈右手前には貯蔵穴と考えられる土坑を確認した。貯蔵穴は長径68cm×短径60cm×深さ12cm。特徴としては、貯蔵穴周辺の住居床面

図17 2号住居遺物出土状況

上及び貯蔵穴内部に、搬入された黄色ローム土が最大2cm厚で面として広がって分布していることが挙げられる。この黄色ローム土は粘性が強くて粒子が細かく緻密であり、竈構築材としては不向きと考えられる。土器などの素地として持ち込まれ、使用されたものなのであろうか。また、住居南壁寄り、床面上には最大径40cmの平石(川原石)が据えられている。その川原石は石皿のように磨られて摩擦しており、一部には10から15条の引っ掻かれたような痕跡が残されていた。

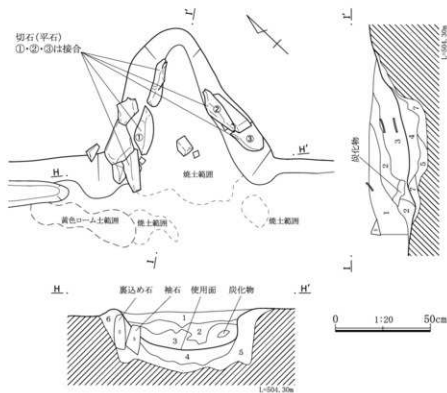
柱穴 P-1とP-2の2基を検出した。P-1は長径34cm×短径28cm×深さ16cm、P-2は長径28cm×短径22cm×深さ12cmを測り、どちらも小規模で、主柱穴とは考えにくい。

床下 住居床中央部では、床下土坑を1基検出した。長径68cm×短径52cm×深さ20cm。土坑壁はやや斜めにガラガラと立ち上がる。土坑は、明瞭に赤化した焼土粒とローム質土との混土により人為的に一括埋戻しされたと考えられる。貼床や住居堀方は検出されなかった。

埋没状況 レンズ状の自然埋没状況を示す。特徴としては、①住居埋土土層(1層)に箱川テフラ(As-Kk):1128年がブロック状或いは部分的にプライマリーな状態で残存していること、②埋土2層中に径10～20cmの円礫(川原石)が15～20個混入していたことが挙げられる。

竈 住居東壁やや南寄り

に、壁を掘り込んで構築される。竈の東側の壁の一部は6号土坑を切って構築されている。石組みの竈である。竈左袖側の残存状態が良く、袖石を含め煙道へ向かって3枚の切石(平石)が原位置を保ったまま1列に並んだ状態で刺さっている。その裏込めと考えられる石(比較的丸みを帯びる)も、3枚の平石のうち、袖石と2番目の石に対応するように1個ずつその外側に据えられ、搬入による黄色ローム土が空間に充填されている。右袖側は袖石を欠損するが、切石2枚は原位置を保っている。そのうち、切石1枚は水平レベルに竈の壁に刺さっており、それを土台とするように重なって、もう1枚の切石が立って刺さっていた。平石に関連しては、竈解体調査後、左袖側の1枚と右袖側の2枚の切石は接合する



■ H-H' 1-1'

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややローム質 炭化粒の混入15～20%と非常に多い。焼土粒も5～7%混入。炭化粒と焼土粒ほぼ均一に3層土全体に混入する
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) 1層土に焼土粒混入。ロームブロック3～5%混入
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土層相当。赤褐色(2.5YR4/8)の焼土ブロック20～30%混入。竈構築材と考えられるローム質土をブロック状に5～10%混入
- 4 赤褐色土(2.5YR4/8) しっかりと焼けた焼土層。固く締まる。搬入された形跡がない
- 5 にぶい黄褐色(10YR4/3) ローム質土と黒色土との混土
- 6 黄褐色土(10YR5/6) 竈構築材。黄色ローム土
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 地山らしくない。黒色土。竈構築に関連ありか。

図18 2号住居竈

ことも分かった。

竈燃焼部(使用面)下面には、最大8cmの厚さで明瞭に赤化した焼土層が認められた(竈埋土4層)。竈床面は、壁面や天井部より、どちらかといえば、焼土化しにくいと考えられるが、この特徴を有する竈は、長野原町上ノ平1遺跡出土の平安時代の竪穴住居跡にも数軒、類例があり、今後、竈の構造やその構築法を考える上での一資料となろう。

遺物 出土遺物は住居の北寄り部分に集中して分布していた。須恵器甕片が多いのが特徴的で、竈内から出土した5点も含めて、計86点が出土し、接合した(2住-1)。この須恵器甕は、口縁部から頸部が欠損しており、破片は1片も出土しなかった。残存する肩部と頸部の境界部の割口は摩擦して丸みを帯びており、欠損した状態で使用された可能性が高い。竈内からはコの字状口縁の土師器甕片16点が出土し、接合した(2住-2)。また、竈手前の住居床面から16点、竈内から1点の灰釉陶器碗の破片が出土し、接合した(2住-3)。胎土がやや褐色味を帯

びていることなどから、猿投系折戸53窯式の可能性があり注目される。住居埋土中からは須恵器坏が2点(2住-4・2住-5)出土した。また、接合はしなかったが、同一個体と考えられる砥石片5点(2住-6a~6e)も出土した。鉄製品では、竈埋土上層中から釘(2住-7)、住居床面から刀子(2住-8)が出土した。非掲載遺物としては、縄文中期土器片62、弥生土器片1、土師器片130、須恵器片17、灰釉陶器片1が出土した。

時期 出土遺物から、9世紀後半から10世紀前半に比定される。

参考文献

- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981『清里・陣場遺跡』
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『大原Ⅱ・村主遺跡』
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上ノ平1遺跡(1)』



図9 2号住居出土遺物(1)

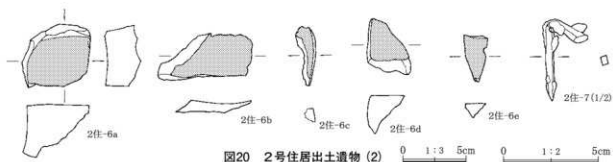


図20 2号住居出土遺物(2)

表6 2号住居遺物観察表

遺物番号	PL	器形・種類	残存状況	出土位置	法量(1階)埋藏部			①色調 ②焼成 ③胎土	器形・成形・装飾の特徴	時期
					器高	口径	底径			
2住-1	1	環	環器部のみ(底部付近を欠損)	2住No.1-22、23、25、26、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63	-	-	(14.0)	①赤褐色 灰色(N4) 外面には暗褐色のムラがある。②赤褐色 ③厚最大3mmの白色砂粒と④4-5mm程度の磁粒を多く含む。	平底で展開の器。外面には輪筋状と思われる凹みがあり段状である。外面は平底で明らかな磨跡見えない。内面は平底で目の内面側に埋藏できる。裏は底面付近に器の残部より上の①層を欠損し、底面は、①層の内面側より1cm以上も出ている。特徴としては、器部の欠けが確認されており、①層を欠損した状態に2次に使用・利用した可能性もあることである。	9世紀後半～10世紀前半
2住-2	1	葉	土師器 陶器部の1/5	2住No.マドNo.2-11、12、13、17、18、22、2住No.23	-	-	(17.0)	①赤褐色 明赤褐色(5YR5-6) 内面とも高い赤褐色気味のものあり。②焼成済 ③厚最大1mmの砂粒を含む。	「コ」の字の器の葉。①層部は外反させ作り出すことにより丸みを帯びる①層へと仕上げられている。その結果、①層部には器の底面側の凹みがある。また、①層部と器部の境目に、①土師部へ平部は平部を帯びるが、中央部は器部の磨跡見えない。①層部及び器部には、磨跡あり。器部は左側方向のへう割り。側部から器部にかけては右方向のへう割り。内面は1.5cm程度で平部に仕上げられる。	9世紀後半～10世紀前半
2住-3	1	瓶	灰瓶 陶器部の1/5	2住No.35-36、37、41、42、43、46、2住No.マドNo.2-9、11、2住No.マドNo.2-3、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、42、43、44、45、46、47、48、49、50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63	63	(18.5)	(8.7)	①赤褐色 灰褐色(10YR5/2) 輪は灰褐色(7.5YR5) 灰褐色(10YR5) ②器面表面を覆い厚い赤褐色の土を帯びる。③厚最大1mmの白色砂粒を比較的多く、④1mm以下の白色磁粒を多く含む。⑤全体にやや赤褐色を帯びる胎土を多量含む。	①層部が大きいことが特徴。全体に細やかな丸みを帯びた器の葉。①層部は外反させ作り出すことにより丸みを帯びる①層へと仕上げられている。その結果、①層部には器の底面側の凹みがある。また、①層部と器部の境目に、①土師部へ平部は平部を帯びるが、中央部は器部の磨跡見えない。①層部及び器部には、磨跡あり。器部は左側方向のへう割り。側部から器部にかけては右方向のへう割り。内面は1.5cm程度で平部に仕上げられる。	9世紀後半～10世紀前半
2住-4	1	環	環器部 陶器部の1/5	2住No.2	38	(13.6)	(7.0)	①赤褐色 灰色(N5) 外面・内面はやや赤褐色を帯びた暗褐色(5YR5) ②器面表面を覆い厚い赤褐色の土を帯びる。③厚最大3mmの白色砂粒と④同程度の磁粒を多量含む。	①層部は外反せず。どちらかといえば、やや内面側に立ち上がる。器部は中央部が作り出される。裏面は右側方向のへう割り。	9世紀後半～10世紀前半
2住-5	1	環	環器部 ①層部破片	2住No.2	-	-	-	①赤褐色 オリーブ灰色(2.5GY6/1) 外面・内面は明オリーブ灰色(2.5GY7/1) ②赤褐色 ③白色砂粒を多く含む。	①層部は強く外反する。	9世紀後半～10世紀前半

遺物番号	PL	種類	残存状況	出土位置	法量(1階)埋藏部				特徴	備考
					①長さ	②厚さ	③幅	④重量		
2住-6a-6e	1	板石	破片	2住S1-S2-S3-S4-S5-S7	最大破片6aの15.5	2.42	3.50	66a-6e合計47.9	器面は中央部と1階とでおり、相当量の使用の磨跡が観える。	破石(石美閃緑閃石岩)
2住-7	1	釘	ほぼ完形	2住No.マド1	①割れ處がりを覆った状態で63.0	②3.0	③5.0	④7.7	角釘、錆付。	
2住-8	1	刀子	完形	2住No.1	①73.0	②4.0	③25.0	④60.6	葉の先端部を僅かに欠損するが、完形の好資料、錆付。	
2住-9	1	白石	完形	2住S8	①406.0	②94.0	③388.0	④2000	扁平な円盤。片面に平坦な器面をもつ。器面の一部に約1mm、深さ1mm程度の縦方向の溝が引かれた痕跡(線)は15あり。	

(2) 焼土跡

◆ 1号焼土跡

位置 70区B-24グリッド

形状 不定形形で、焼土の厚さは最大9cmを測る。搬入された様子は見られず、原位置でしっかりと赤化している。

時期 遺物の出土はないが、検出面から判断して平安時代に比定される。

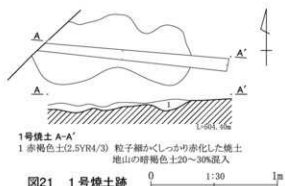


図21 1号焼土跡

第5章 江戸時代(天明三年)の調査

第1節 検出された遺構と遺物

1 面目(泥流面)では、畑2、道1とそれに沿う溝1を検出した。

(1) 畑

本遺跡の発掘調査は、建設される道路の路線範囲内の調査であるため、最大幅でも約12mという細長い形状の調査区の中で実施された。従って、検出された1号畑については、南東から北西方向へ延びる畑の東西両端に相当する畑境(畑遺構とその他の境界部を「畑境」と呼称する)の一部(西側畑境：約12m 東側畑境：約10.5m)、2号畑では同方向へ延びる畑の西側の畑境の一部(約10.5m)のみを確認するにとどまった。調査区北側の吾妻川沿いの区域、南側の山際の区域、或いは2号畑東側の区域では、畑境の位置や別の畑の存在の有無等、全く確認できなかったのである。その結果、畑遺構の全体構造に關して示唆されている「単位畑」や単位畑の集合である「中単位」、また単位畑や中単位の集合による畑の「筆」(関 俊明 2003「群理文第319集」)等の把握や確認調査も不可能であったことが惜まれる。

しかしながら、検出した畑の耕作状態を示す畝やサクの残存は良好であり、その断面形状から把握できる泥流畑の「1類から9類の畝断面状況説明一覧」(群理文第319集)による分類把握は可能となった。

表7は、各畑の計測値等の一覧である。なお、面積の算出については、デジタル化した遺構平面図を用いてCADソフトによる計測を行った。また畝幅については、遺構平面図上で適切な部分と判断される範囲で10条分の畝幅を測定し、該当の条数で除して求めた。

表7 畑計測値表

畑名	面積：㎡	畝・歩	傾度	分類	平坦面	畝幅：m	相当尺寸畝
1	310.0	3・4	3°	2類	確認できない	0.53	1.75
2	146.8	1・14	2°	2類	確認できない	0.41	1.35

◆ 1号畑

調査区の南西部、70区B～G-15～23グリッドにおいて検出した。傾度は3°(1号畑B-B'において図上計測)の緩やかな傾斜面上にある。

泥流の堆積厚は、調査区南端(泥流厚測定ポイント3)で130cm、北壁の最も薄い堆積部分で40～50cmであった。

畑境は、西側の一部と東側の一部を検出したが、吾妻川沿いの北側の畑境と山際の南側の畑境は調査区外のため検出できなかった。検出した畑境の一部は、西側では耕作の痕跡のない野地と、東側では溝(1号溝)との境界をなしていた。

畑の残存状態は良好であり、泥流中の礫や石等による擾乱も比較的少なかった。検出された畝サクの凹凸は明瞭で、低いサクの部分にAs-Aの堆積が確認できた(図24及び図25参照)。したがって、As-A

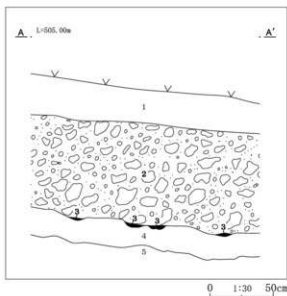


図22 畝サク状態確認トレンチ A-A'

- 1 現工事用進入路のための盛土
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 天明泥流堆積物 径10～30cmの礫20～30%混入
- 3 浅褐色(As-A) 灰黄色(2.5Y7/2) 径1～3mmの発色の良い軽石畝分が沉着し部分的に赤味を帯びる
- 4 暗褐色土(10YR3/4) 天明三年当時の畑耕作土 径10～20mmの礫1～3%混入
- 5 褐色土(10YR4/4) 黒色土とローム土との混土 砂質で小礫1%混入

図22 畝サク状態確認トレンチA-A'

※ 尺換算は曲尺：1尺=10/33mを用いる。

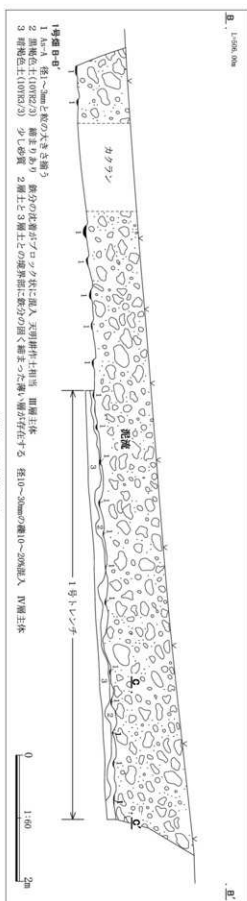


図24 1号畑B-B'

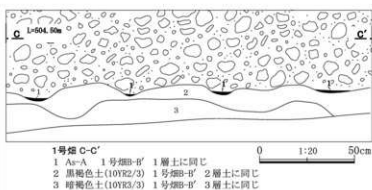


図25 1号畑C-C'

降下後の土寄せ等の耕作作業は行われなかったと考えられる。「1類から9類の畝断面状況説明一覧」[群埋文第319集]によれば2類に属し、「一番ザクと二番ザク(土用の倍土)が終了後、As-A軽石の降下があった。」とされる類である。

畝幅は53cmで尺換算すると1尺7寸五分。2号畑よりやや広い。耕作作物を断定できる植物遺存体等は検出されなかった。

畑の表面に残された、泥流中の礫や石等に引きずられたと考えられる傷跡の方向は、ほぼ東西方向である。この傷跡の方向は等高線にほぼ直交し、西側が低く東側が高いこと、北側を流れる吾妻川がこの付近では東流していること、調査区の西側にはエイ沢(『岩島村誌』によれば天明三年当時はイワイ沢とある)という沢が南へ向かって入り込んでおり、泥流が浸入し易い地形となっていること、などから推定すると、泥流の流下・浸入の方向は西から東方向であると考えられる。

畝サクは南西から北東方向に走向し(N-50°-E)、等高線に対しては斜行する。現在の畑の耕作においても畝サクは等高線に沿って作るのが保水性の意味で一般的である。しかし、1号畑では地形の傾斜方向にはあまり影響されずに畝サクが作られている。この地形の傾斜方向と畝サクの走向方向との差異が生じた理由には、主要道(旧道)と短冊状に割り振られた地割りとの関連があると考えられるが、詳細については後述する。

遺物は、1号トレンチ内、畑耕作土中より陶磁器

染付碗片(1畑-1)、耕作土直上より陶器筒形香炉片(1畑-2)、陶器皿片(1畑-3)などが出土している。

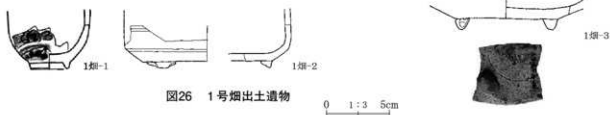


図26 1号畑出土遺物

表8 1号畑遺物観察表

遺物番号	FL	種類	部位	残存状況	出土位置	釉の特徴	胎土とその他の特徴	生産地等	時期・型式
1畑-1	1	陶器	染付碗	胴部・底部	70C1トレンテ(C-D-20-21)	透明。	灰白色。染付。	肥前	近世後半
1畑-2	1	陶器	筒形香炉	底部	A畑No2	オリーブ褐色。鉄釉。	灰黄色。底部に低い脚を貼り付ける。	瀬戸・美濃	近世後半
1畑-3	1	陶器	皿?	底部	A畑No7	黄褐色。鉄釉。	灰黄色。底部に低い脚を貼り付ける。見込み目録あり。	瀬戸・美濃?	近世後半?

◆ 2号畑

調査区の北東部、69区X~70区B-70区22~79区1グリッドにかけて検出した。斜度は2°(2号畑D-D'において図上計測)で、1号畑より傾斜がさらに緩く、ほぼ平坦地といえる。

泥流の堆積厚は、調査区南壁の泥流厚測定ポイント1の地点で140cm、ポイント2の地点で90cmを測る。2号畑付近での調査区北壁の泥流の堆積厚は、南壁とはほぼ同程度であった。1号畑付近での北壁の泥流厚が南壁に対して、極端に薄くなるのと対照的である。これは、調査区西側を吾妻川方向に北流するエイ沢の浸食作用により、傾斜が次第に強くなっていく地形と泥流の堆積厚との間に関連があると考えられる。

畑境は、西側を一部のみを検出した。北側と南側畑境は調査区外のため、東側の畑境は畑の畝サクの

残存状態が不良のため、検出には至らなかった。検出した西側の畑境の一部は、1号道との境界をなし、溝状に凹んだ部分にはAs-Aの堆積が認められた。

畑の検出状況は、西側部分が良好で、逆に東側部分ほど不良であった。その原因には、東側部分ほど泥流の流下の勢いが激しく、泥流中の礫や石による攪乱で畝サクが壊されてしまったこと、或いは東・西部分には別個の単位畑が存在するために、当時の



図27 2号畑D-D'・E-E'

畑の耕作状況等には差異があり、東部分は当初より畝サクが不明瞭であったことが考えられる。断定はできないが、2号畑の畝サクは東方向へ移行するに従って漸次消失しており、そこに区画や境界は認められないこと、また畝サクの分類は東西の部分を開かず2類であり、耕作状況に差異は認められないこと、畝サクは部分的には消失しているが、走向方向に食い違いは認められないことなどから、前者の可能性が高いと考える。

表9 2号畑遺物観察表

遺物番号	PL	種類	残存状況	出土位置	計測値	特徴
2畑-1	1	鉄砲玉	完形	A畑No.5	径110mm 重量80g	大きさ、重量等から判断すると、やや重量的には欠けるが、近世から明治期まで継続的に使用された25号～3号の砲弾に属すタイプ。発射された打痕と考えられる平坦な面が観察できる。

(2) 道

◆ 1号道

1号畑と2号畑との境界部に位置する。70区B・C-22・23グリッドにて検出した。南東から北西に向かって(N-38°-W)、ほぼ直線的に走向する。

道は、部分的にムラは認められるが、全面As-Aに覆われている。歩行面は比較的硬直しておらず、凹凸も認められる。ピット状の凹みには、泥流が入り込んでおり、地境菜などの立木痕、泥流中の礫や石による傷跡、石が何らかの目的で元々据えられた跡、柱穴跡等考えられるが、断定できない。

道幅は、90～140cm程度のばらつきは見られるものの、平均すると約110cmを測り、一般的な畑境に作られる、所謂「踏み分け道」と比較すると広い。道の西側には1号溝が平行して沿い、東側にも2号畑のやや溝状に凹んだ形状の畑境が沿うため、道主体部はやや漏斗状の形状を呈している。

調査区の80m南には、旧道が東西に走っており、

畝幅は41cmで尺換算すると1尺3寸5分。1号畑よりやや狭い。

畝サクは南西方向から北東方向に走向し、(N-55°-E)、等高線にはほぼ沿って作られる。耕作作物を断定できる植物遺存体等は検出されなかった。

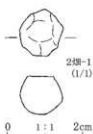


図28 2号畑出土遺物

遺物は、耕作土直上より鉄砲玉(2畑-1)などが出土している。

1号道はそれに対して直角に北西方向に延びてきている可能性もある。

遺物の出土なし。

(3) 溝

◆ 1号溝

1号道の西縁に位置する。70区B・C-22・23グリッドにて検出した。1号道と同方向へ、ほぼ直線的に走向する。勾配から、雨水等は南東から北西方向へ流れると想定される。

溝幅は50～60cmで、最深度15cm。底部にはAs-Aが約1cm厚で堆積し、流水等により流された形跡は認められなかった。

遺物の出土なし。

参考文献

- 沼島村誌編集委員会 1971 『沼島村誌』
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『久々戸遺跡・中棚二遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『川原湯勝遺跡(2)』

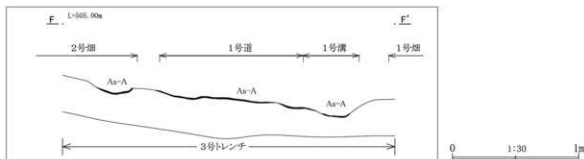


図29 1号道・1号溝F-F'

第6章 遺構外の出土遺物

第1節 出土状況と遺物内容

江戸時代(天明三年)から縄文時代に至る4面調査の過程で、遺構外遺物は土器563点、石器20点が出土した。「遺構外遺物」とは、グリッド一括取り上げを行った遺物と遺構埋土中に混入したと考えられる時期の異なる遺物の2種を扱う。そのうち、ここに掲載した遺物は、土器28点、石器5点、計33点である。非掲載として扱った遺物は、縄文中期土器片294点、縄文後期土器片10点、弥生前期～中期土器片5点、土師器片179点、須恵器片28点、羽釜片4点、灰釉陶器片1点、近世陶磁器片14点、黒曜石の石器剥片等15点である。

掲載遺物のうち土器については、縄文中期前半五領ヶ台式から勝坂式土器、縄文後期後半高井東式土器、弥生前期から中期前半にかけての条痕文土器の3期に分類できる。その中で特筆すべきは、高井東式土器と弥生前～中期条痕文土器の出土が挙げられる。

10a～10fは同一個体の高井東式土器である。出土した口縁部(波底部)片及び波頂部の突起片等を接合し復元を試みた。『雅楽谷遺跡』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1990)における高井東式3分類＝

A：縄紋＋沈線紋・刺突紋系、B：沈線紋・刺突紋系、C：沈線紋・凹線紋系によれば、C類の絶啼である。関連する高井東式土器は、本遺跡より約6km下流の吾妻川右岸の下位段丘面上に位置する唐輪遺跡(吾妻町教育委員会1983)で資料が出土している。図示された2個体の土器はともにC類の凹線・沈線紋系であり、本遺跡出土10a～10fと共通する。東吾妻町地域においては、依然、参考比較可能な資料の出土は少ない。現時点では、高井東式A類・B類の主要な文様構成要素である縄文と刺突文に関して、その使用頻度が比較的小さいということ、当該地域での一つの特徴として挙げておこう。

縄文晩期から弥生前期にかけての土器に関しては、八ッ場ダム地域では比較的良好な資料が出土している。しかし、「特徴として、①…氷I式中段階のシャープな浮線文土器が川原湯勝沼遺跡を除いて他の遺跡に比較的小さいこと、②相対して弥生前期から中期にかけての土器の出土が各遺跡で比較的多い…」(篠原2008)と、筆者が以前、特徴として挙げたが、この特徴は、八ッ場ダム水没地域(長野原町地域)とは吾妻渓谷を挟んで東側に位置する本遺跡についても該当するようである。すなわち、氷I式中段階のシャープな浮線文土器は伴わずに、細密条痕文及び条痕文土器(12・13・14a～14d)のみが単独出土する。

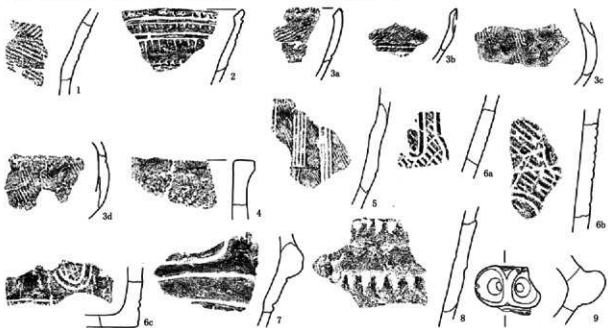


図30 遺構外出土遺物(1)

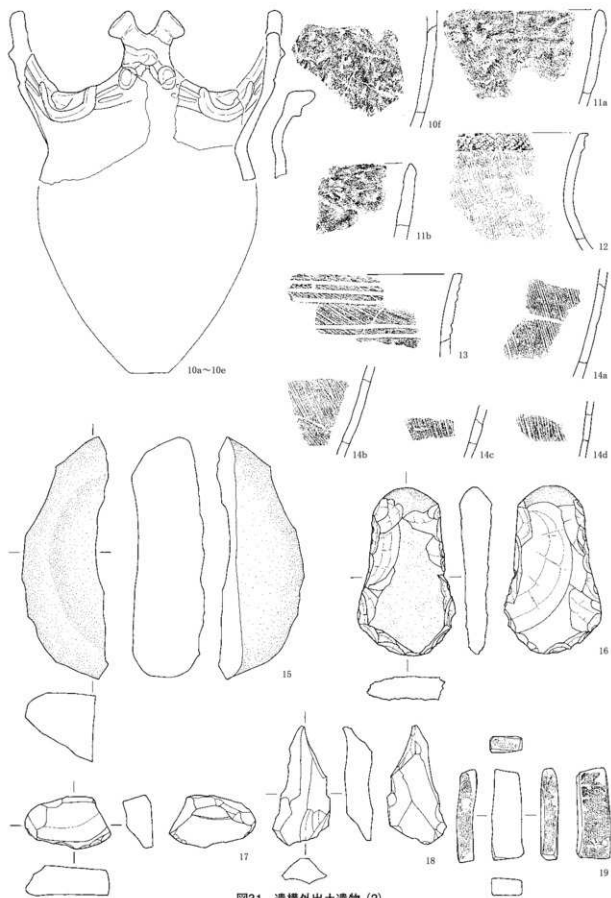


図31 遺構外出土遺物(2)

0 1:3 5cm

第6章 遺構外の出土遺物

表10 遺構外出土遺物観察表

遺物番号	PL	器種	部位	残存状況	出土位置	①色調 ②構成 ③胎土	器形・文様・整形等の特徴	時期・型式
1	2	深鉢	胴部	破片	700CX20グリッド	①暗褐色(75YR3-6) ②良好 ③粒径最大2mmの高粒砂と細かい白色砂粒を僅かに含む。繊維の混入は確認できない。	L線を縦に、R線を横に施すことにより、横位引状文を構成する。内面は丁寧な調整。部分的に滑沢がある。	縄文前期?
2	2	深鉢	L胴部	破片	2位No.63	①暗赤褐色(5YR3-6) ②良好 ③粒径最大2mmの高粒砂と雲母片を多く含む。ざらつき感あり。	L線はほぼ直線的に立ち上がる器形である。口縁部は肥厚し、L線部は内筒状に突出することにより、断面三角形を呈する。外面上縁は手執り管の内使用による平行沈線や彫刻痕跡、同工により、内筒の異なる色区をその上下に施す。外面下部は同工による平行沈線や彫刻痕跡。その下部に施されたと考えられる彫刻痕跡を施す。さらに下部には手執り管による彫刻痕跡を施す。内面は丁寧な調整。	五葉+付式
3a~3d	2	深鉢	L胴部~胴部	破片	2位No.45・2位No.58・2位土	①赤褐色(5YR4-8) ②良好 ③粒径最大3mmの高粒砂と雲母片を多く含む。ざらら白色砂粒及び雲母片比較的多く含む。	L線はやや内筒状に立ち上がる器形。口縁部は内筒状に突出し、断面は、肥厚し、L線部は縦位に細筒状に突出し、1条の線状沈線と1条の沈線文が施される。内外面とも丁寧な調整。	五葉+付式II
4	2	深鉢	L胴部	破片	700CX18グリッド	①暗赤褐色(5YR3-6) ②良好 ③粒径最大1mmの高粒砂多量に含む。ざらつき感あり。	L線は肥厚し、口縁部とL線部はともに、平らに面取りする。施文はL線部が施文が、内面は丁寧調整。	五葉+付式
5	2	深鉢	胴部	破片	700CX22グリッド	①暗赤褐色(5YR3-6) ②良好 ③粒径最大1mmの高粒砂を多く含む。	施文はL線部、手執り管の内使用による平行沈線文を重層させて、2部~3部程度に施す。内面は丁寧調整。	五葉+付式
6a~6c	2	深鉢	胴部~胴部	破片	700CX19グリッド 2部 D-19グリッド 2部 E-18グリッド 2部	①暗色(10YR4-4) ②良好 ③粒径最大2mmの白色砂粒及び砂粒を多く含む。	手執り管の内使用による斜位の平行沈線が施した後、底面を中心とした斜位による斜位の沈線や彫刻痕跡の彫刻文を施す。その後、手執り管による平行沈線や彫刻痕跡を施す。内面はややざらつきが、底面は丁寧な調整。	五葉+付式
7	2	深鉢	胴部	破片	2位土	①暗褐色(7.5YR4-6) ②良好 ③粒径1~2mmの砂を多く含む。骨の雲母片の混入は見られない。	器形に沿って上下にやや傾いた沈線文を施す。内面は多少ざらつき。	河台1a式
8	2	深鉢	胴部	破片	2位土	①暗褐色(7.5YR3-4) ②良好 ③粒径最大3mmの白色砂粒と細かい雲母片を多く含む。	器形を歪ませ、交互するよう2段のヒズ調整を施す。内面は丁寧な調整。	河台1b式
9	2	深鉢	突起	破片	700CX20グリッド	①暗赤褐色(5YR3-6) ②良好 ③粒径最大4mmの高粒砂と径1mmの石片及び白色砂粒を多く含む。	突起状突起。突起の縁部には2つセットの筋を施す。突起には沈線が施す。施文は彫刻文。	特殊式
10a~10f	2	深鉢	L胴部~胴部	破片	690CX24グリッド 2部 690CX25グリッド 1部 690CX25グリッド No.2,3,4 1部 No.12,13 1部土	①黒色(10YR2-1) ②良好 ③径1mmの白色砂粒多量に含む。	大口部を呈するL線で、山形の直線部を持つ。直線部には輪を二つ配し、短手には突起を左右対称に二つ配す。突起の頂部には筋を施す。直線部には輪を一つ配す。L線は縁部で区画し、横位沈線を急流文とする。L線はやや肥厚する。胴部は筋を有し施文。内面は丁寧な調整。	高井原式
11a~11d	2	深鉢	L胴部	破片	1位No.6 1位床下No.1 690CX25グリッド	①黒色(10YR2-1) ②良好 ③径1mmの高粒砂と径最大2mmの砂粒を多く含む。	L線は平線で内筒状に立ち上がる。内面は彫刻痕跡を残し、断面、内面は横位の十字面取り、ややざらつき。	高井原式
12	2	甕	L胴部~胴部	破片	800CX14グリッド 3部	①暗褐色(10YR3-4) ②良好 ③粒径最大2mmの白色砂粒及び砂粒を多く含む。	大口部は直線的に立ち上がる。口縁部は平らに面取りする。重家状工具と考えられるやや粗めの表面文(5-6mm)を斜位施文。やや丸みの工具(5mm)を使用して3条の平行沈線文を施す。また下部は同工による2条の平行沈線文を施す。内面は丁寧な調整。	弥生前期
13	2	深鉢	L胴部	破片	2位No.35 2位土	①暗色(7.5YR6-8) ②良好 ③粒径最大2mmの砂粒多量に含む。	L線はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は平らに面取りする。重家状工具と考えられる粗面赤褐色(7-8mm/15mm)を斜位施文する。施文ははやや丸みのある。内面は丁寧調整。	弥生前期~中期前半
14a~14d	2	甕	胴部	破片	790CX24グリッド 2部 2位No.23 2位 カド土 2位土	①黒色(10YR2-1) ②良好 ③径1mmの高粒砂と径最大2mmの砂粒を多く含む。	重家状工具によると考えられる粗面赤褐色(7-8mm/15mm)を斜位施文する。施文ははやや丸みのある。内面は丁寧調整。	弥生前期

遺物番号	PL	器種	部位	残存状況	出土位置	①長径 ②短径 ③幅mm ④重量g	特徴	備考
15	2	石皿		1/4	2E58	① 8920 ② 520 ③ 670 ④ 18097	扁平な円盤。片面に2面の磨面をもつ。	粗粒輝石安山岩
16	2	打製石片		完成	2E58土	① 8320 ② 250 ③ 770 ④ 2978	やや狭い人形磨面。裏面の整形、調整はやや不具。	粗粒輝石安山岩
17	2	ステレタイプ		完成	表土	① 680 ② 240 ③ 420 ④ 777	厚手で台形を呈し、下部には刃部を有し、右手で握り易く整形されている。調整はやや不具。	ガラス質安山岩
18	2	石核		完成	A8No.8	① 940 ② 240 ③ 460 ④ 813	楕圓な石核。縦長形。	ガラス質安山岩(パン度状火山弾を加工したものか?)
19	2	砥石		完成	790CX2グリッド 3部	① 720 ② 330 ③ 320 ④ 448	立方体の4面に磨面あり。1面に磨面。一部先端部を欠損。	凝結石(石質緑閃石?)

参考文献

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990「雅業谷遺跡」報告
 池田美穂子校岡関係埋蔵文化財調査報告

藤原正洋 2008「八ッ場ダム地域における縄文晩期末から弥生前期の土器」『山根遺跡(2)-上原IV遺跡-幸神遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

第7章 まとめと課題

上郷西道路の発掘調査では、縄文時代の土坑3基(うち1基は陥し穴)、弥生時代前期の土坑1基、平安時代の竪穴住居(2号住居)に切られる土坑1基、平安時代の竪穴住居2軒、焼土跡1基、江戸時代(天明三年)の畑2枚、道1条、溝1条を検出した。

以下、検出された遺構や遺物の中で、特筆すべき点及び今後の課題を挙げ、報告のまとめとしたい。

◆縄文～弥生時代の土坑について

2号土坑で阿玉台Ⅰa式土器が出土している。3号土坑は、その形状から陥し穴と推察され、底部にビットを2基有するタイプである。5号土坑は、細密条痕文の甕と考えられる土器片が出土し、弥生時代前期に帰属すると考えられる。

◆平安時代の竪穴住居について

検出した2軒(1号住居・2号住居)は、どちらも9世紀後半～10世紀前半に帰属する。1号住居は東西2.0m×南北1.9mの小規模な住居で、北壁に竈を有する。竈は石組みの構造で吉井型の羽釜を伴う。注目すべきは、竈右袖脇には土坑状の堀込みの存在で、出土した羽釜の胴部大型破片は、竈内より出土した羽釜と同一個体で接合した。土坑埋土及び壁や底部付近に焼土は見られず、竈の火を受けた痕跡はない。したがって、作り替え以前の竈とは考えにくく、出土遺物が接合していることから、竈と同時期に使用された施設と思われる。その使用目的については、形状や位置から推察し、甕・羽釜など煮沸具や坏・椀類など供膳具等の保管場所、貯蔵穴の代用など考えられるが、現時点では不明である。今後の調査例の増加と研究の成果を待ちたい。2号住居は東西4.1m×南北4.3mの中規模の住居で、東壁に竈を有する。竈は石組みの竈でコの字状口縁の甕を伴う。竈の構築材である石は切石(平石)を使用し壁面に一列に並べて差し込み、その裏込めに丸石を

据え黄色ローム土を充填している。残存状態が良好であり竈構築方法が確認できる好資料である。2号住居の出土遺物で注目すべきは、口縁部を欠損した状態で使用されたと考えられる須恵器甕と猿投系灰軸陶器椀である。須恵器甕は竈内及び竈左手前床面に分布していた。出土した破片86点は全て接合したが、口縁部及び底部だけは欠損している。また頸部の括れ部の欠け口は摩耗し丸みを帯びており、口縁部を欠損した状態で使用された可能性が高い。使用目的については、最近報告された「上郷岡原遺跡(2)」(群埋文438集)に興味深い例がある。上郷岡原遺跡は、本遺跡と1kmしか離れていない同大字地内にある。V区1号住居はコの字状口縁甕を伴う同時期の竪穴住居である。この住居の竈も石組みの竈で極めて残存状態が良く、天井石・支脚石も原位置を保っている。この竈の掛け口部に須恵器蓋が支脚に乗ったままの状態で見えられていた。須恵器は口縁部をほとんど欠損するもので、土器器に代えて煮炊きで使用された可能性があると報告されている。本遺跡出土の須恵器の場合、竈で火を受けた痕跡は確認できないが、須恵器の口縁を欠損した状態で使用されている点、竈で使用された可能性が高い点等共通する。同時期、同地域で以上のような出土例があることは注目に値するであろう。2号住居では灰軸陶器椀が1点出土している。これは、胎土の特徴などから猿投系折戸53窯式の可能性がある。東濃系の灰軸陶器の出土数に比較し、猿投系のそれは少なく注目に値する。

◆江戸時代と現在の地割りの比較及び古道との関連について

天明泥流下では、畑・道・溝のそれぞれ一部を検出した。ここでは、短冊状に割り振られた畑、つまり地割りの方向が、現在の地割りの方向と一致すること、また調査区約70～80m南側に東西に延びる吾妻溪谷遊歩道と短冊状の地割りととの関わり等について、若干考察を行いたい。

上郷西道路の所在する東吾妻町大字三島字十二沢

地区は旧地名を「猿橋平(さるはしだいら)」という(猿橋及び旧道の位置、また旧地名との関わりなどについては「第2章遺跡の環境」7～8頁で触れたのでご覧下さい)。

まず、図32の調査区に貼り付けた畑・道・溝の遺構平面図と現在の地積図を基にした周辺の地割りの様子をご覧下さい。調査区内では、西側から1号畑、1号道、2号畑を検出している。1号畑と2号畑の畝サクの走行方向はほぼ同方向である。調査区周辺の現在の地割りについて見ると、調査区南側に東西に伸びる吾妻溪谷遊歩道を基準として基本的には北西方向へ細長い短冊状に割られていることが分かる。短冊状に割られた土地の幅員は様々ではあるものの、その伸びる方向は北西方向へ揃っていることが分かるだろう。現在の遊歩道は、エイ沢を渡る橋も架けられておらず、また工事用の仮道路とところどころ分断されており、観光や散策に訪れる人の影は少ない。しかし、この道を基準として短冊状に割られた地割りから判断すれば、古くからの主要道であったことは事実であろう。前述の三島村天明三年泥入図(図3・7頁)に描かれたイヤイ沢を渡り、猿橋へと伸びる道は、この吾妻溪谷遊歩道であると考えられる。

さて、次に今回発掘調査された天明泥流下の畑や道の位置と現在の地割りのラインを比較してみよう。泥流下の畑等の地割りが被災後復旧の際にも継承踏襲されることは、関俊明(2003)による中棚Ⅱ遺跡調査事例においても指摘されている。筆者も発掘調査時より、1号畑の西の畑や1号道の位置が現在の地境に対しても継承踏襲されている可能性があることを想定していた。しかし、整理段階で確認作業を行った結果、残念なことに、地境のラインは一致しなかった。ところが、1号畑の幅は現在の2つの筆の土地の幅を合計すると(●+▲=約26m)、ほぼ同じ長さであることが判明した。1号畑の畝サクの走行する方向は短冊状に伸びるこれらの土地に対してほぼ直角であり、梯子状に耕作されていることも傍証となる。そこで、1号畑を南西方向へ約8m

スライドすると、連動して1号道も8mスライドし、▲の土地の東の地境に重なる。天明三年の泥流被災後、以上のような復旧作業が実施されたとすれば、泥流被災後の復興過程を研究する上で、一つの新しい視点となる。

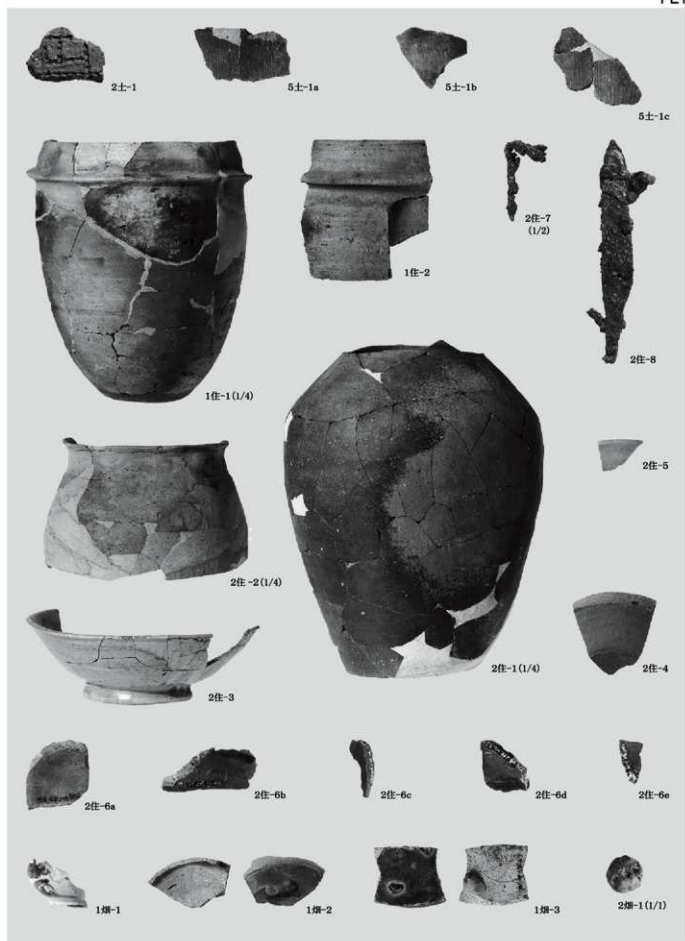
参考文献

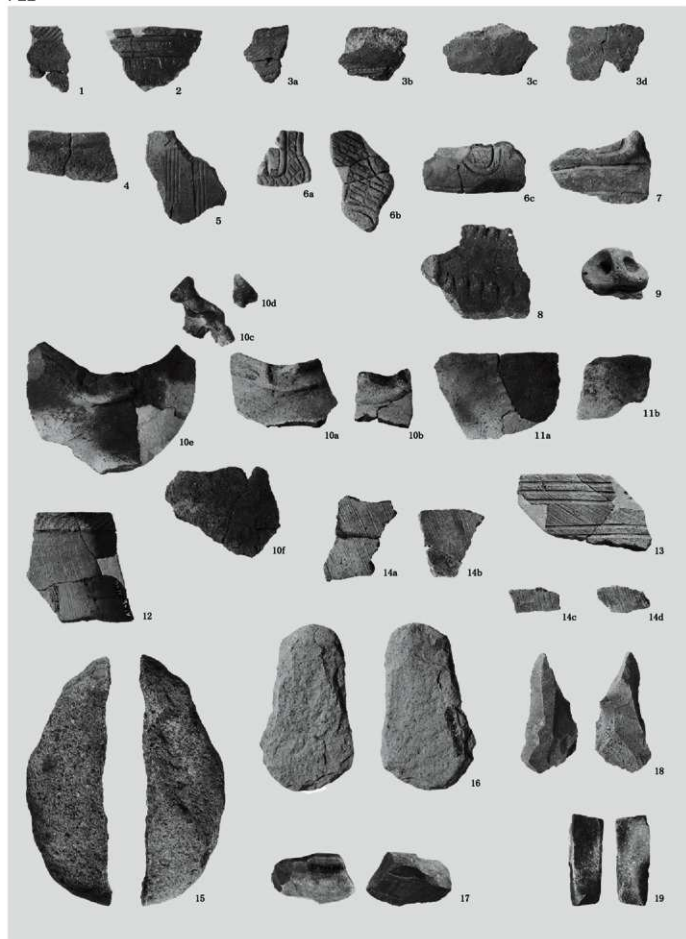
- 岩高村誌編集委員会 1971『岩高村誌』
財団法人 群馬県歴史文化財調査事業団 2003『入ヶ戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・猿橋中村遺跡』第319集
財団法人 群馬県歴史文化財調査事業団 2008『上郷岡原遺跡(2)』第438集

報告書抄録

書名ふりがな	かみごうにしいせき
書名	上郷西遺跡
副書名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	25
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	448
編著者名	篠原正洋
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20081030
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	かみごうにしいせき
遺跡名	上郷西遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんひがしあがつままちおおあごみしま
遺跡所在地	群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島
市町村コード	10429
遺跡番号	
北緯(日本測地系)	363334
東経(日本測地系)	1384341
北緯(世界測地系)	363345
東経(世界測地系)	1384330
調査期間	20070508 - 070615
調査面積	1085
調査原因	町道新井横谷松谷線工事事業
種別	集落跡/畠跡
主な時代	縄文/弥生/平安/江戸
遺跡概要	集落 - 平安 - 住居2 + 焼土跡1 - 土器 + 灰軸陶器 + 石器 + 刀子 + 釘/畠跡 - 江戸 - 畑2 + 道1 + 溝1 - 陶磁器 + 鉄砲玉/その他 - 縄文 - 土坑2 - 土器 + 石器/弥生 - 土坑1 - 土器
特記事項	弥生時代前期の土坑と遺物。平安時代(9世紀後半 - 10世紀前半)の竪穴住居跡と天明三年浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた畑・道・溝。
要約	本遺跡は標高約500m。吾妻峡出口の吾妻川右岸に開けた平坦地上に位置する。発掘調査の結果、弥生時代前期の条痕文土器を伴う土坑及び散布資料を検出した。ハッ場ダム地域及び吾妻川流域では、縄文晩期終末から弥生時代にかけての時期の出土資料は比較的多く、本遺跡資料もその一翼を担う。平安時代の竪穴住居跡2軒はどちらも9世紀後半から10世紀前半に帰属し、羽釜・コノ字状口縁の土師器甕・灰軸陶器・須恵器甕などを伴う。特に灰軸陶器甕は猿投系の折戸53号窯の可能性もあり、希少な出土例となる。また天明三年浅間山噴火に伴う泥流に埋もれた畑・道・溝も検出した。

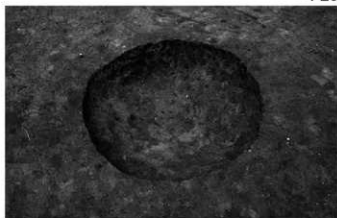
写真図版







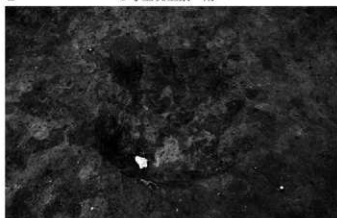
1 1号土坑セクション 南→



2 1号土坑全景 南→



3 2号土坑セクション 南→



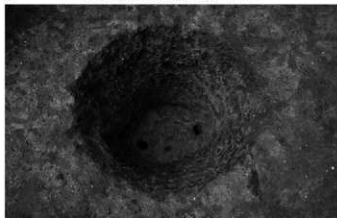
4 2号土坑全景 南→



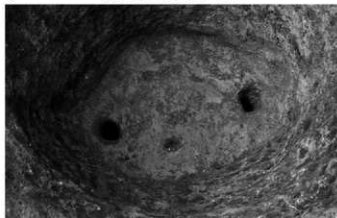
5 3号土坑および風倒木痕 南西→



6 3号土坑セクション 南→



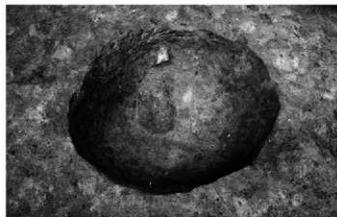
7 3号土坑全景 南→



8 3号土坑底部ピット近接 南→



1 5号土坑セクション 南西→



2 5号土坑全景 南→



3 6号土坑セクション 西→



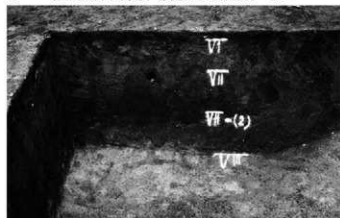
4 6号土坑全景 西→



5 弥生土器出土状況 (奥壁は天明泥流) 東→



6 旧石器試掘作業風景 北西→



7 基本土層 (1)



8 基本土層 (2)



1 1号住居検出作業風景 西→



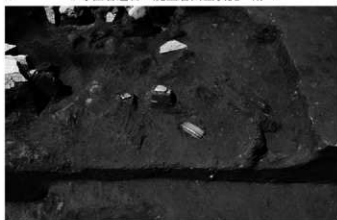
2 1号住居セクションA-A' 南→



3 1号住居遺物・焼土層出土状況 南→



4 1号住居炭化材出土状況(焼土層除去後) 南→



5 1号住居遺物(1住-2:羽釜)出土状況近接 南→



6 1号住居全景 南→



7 1号住居カマドセクションC-C' 南→



8 1号住居カマドセクションD-D' 東→



1 1号住居遺物（1住-1：羽釜が主体）出土状況 南→



2 1号住居カマド・右袖脇の土坑全景 南→



3 1号住居カマド・右袖脇の土坑全景 北→



4 1号住居P-1セクション 南→



5 1号住居P-1全景 南→



6 2号住居検出状況 東→



7 2号住居セクションA-A' 南東→



8 2号住居セクションA-A' 近接(1) 南東→



1 2号住居セクションA-A' 近接(2) 南東→



2 2号住居セクションB-B' 北東→



3 2号住居遺物出土状況 南西→



4 2号住居遺物(2住-8: 刀子) 出土状況 西→



5 2号住居遺物(2住-3: 灰軸陶器) 出土状況 南→



6 2号住居埋土(2層)中の円礫メモ



7 2号住居黄色ローム土検出範囲 南→



8 2号住居全景 南西→



1 2号住居内床に据えられた石(2住-9)と傷痕 北西→



2 2号住居カマドセクションH-H' 南西→



3 2号住居カマドセクション1-1' 南東→



4 2号住居カマド遺物出土状況 南西→



5 2号住居カマド全景(カマド内壁の切石と裏込めの石) 南西→



6 2号住居カマド床下の厚い焼土層 南東→



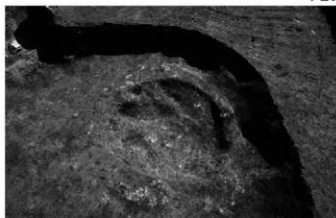
7 2号住居カマド右袖側土台の切石と上に乗った内壁の切石 南西→



8 2号住居カマドに使用された切石と接合状況メモ



1 2号住居貯蔵穴セクション 南西→



2 2号住居貯蔵穴全景 南西→



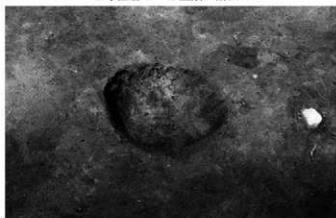
3 2号住居P-1セクション 南西→



4 2号住居P-1全景 南西→



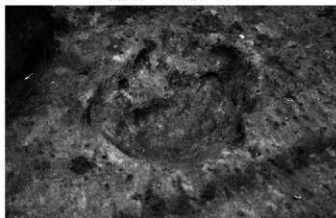
5 2号住居P-2セクション 南西→



6 2号住居P-2全景 南西→



7 2号住居床下土坑セクション 南東→



8 2号住居床下土坑全景 南東→



1 1号焼土跡全景 南→



2 天明泥流除去前遺跡風景 北東→



3 畝サク状態確認トレンチセクションA-A' 北東→



4 泥流厚測定ポイント1 北西→



5 泥流厚測定ポイント2 北西→



6 泥流厚測定ポイント3 北西→



7 泥流下遺構検出作業風景 南東→



8 畑・道・溝全景(調査区拡張前) 南→



1 畑・道・溝 全景（調査区拡張後）南→ ※画像データ2枚を合成により作成



2 1号畑全景 北東→



3 1号畑検出作業風景 南西→



4 1号畑セクションC-C' 西→



5 1号畑全景（調査区拡張後）南→



1 1号畑調査区拡張部畑検出作業風景 北東→



2 1号畑泥流中の石による傷跡 西→



3 2号畑全景 西→



4 2号畑セクションD-D' 西→



5 1号道・1号溝全景 南東→



6 調査区南を東西に横切る古道（現遊歩道） 北東→



7 吾妻川との比高差（遺跡は右上の平坦地） 西→



8 吾妻峽鹿飛橋 北→

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第448集

上 郷 西 遺 跡

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第25集

平成20年10月25日 印刷

平成20年10月30日 発行

発行／編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

URL <http://www.gunmaibun.org>

印刷 株式会社開文社印刷所